

史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一六―一九

史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡

2019年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、二条城整備計画に伴う史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

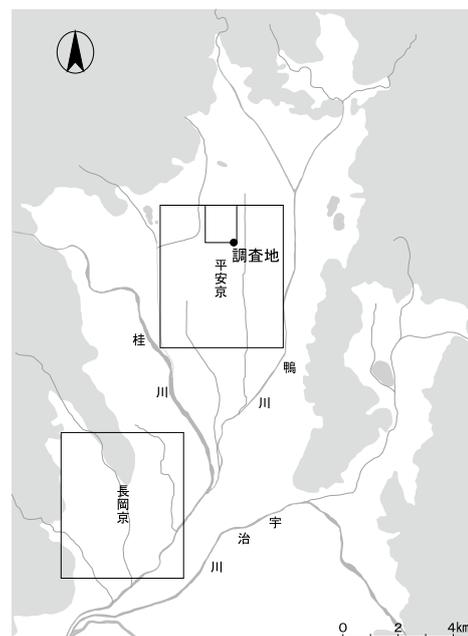
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡
- 2 調査所在地 京都市中京区二条通堀川西入二条城町541
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 調査その1：2015年5月18日～6月4日
調査その2：2016年4月18日～5月11日、6月24日
調査その3：2016年10月31日～11月15日
- 5 調査面積 調査その1：36.5㎡、調査その2：22㎡、調査その3：22㎡
- 6 調査担当者 調査その1：モンペティ恭代・関広尚世、調査その2・3：近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」・「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤章子・モンペティ恭代・吉崎 伸
- 14 水中調査 水中調査に関しては、NPO法人水中考古学研究所に委託した。調査では佐賀大学の宮武正登教授の協力を得た。写真は、山本祐司氏による。
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

第1章 調査経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	3
第2章 位置と環境	5
1. 歴史的環境と立地	5
2. 既往の調査	5
第3章 調査その1	9
1. 基本層序	9
2. 遺 構	10
(1) 1トレンチ	10
(2) 2トレンチ	12
(3) 3トレンチ	14
(4) 4トレンチ	15
3. 遺 物	18
4. 小 結	19
第4章 調査その2	21
1. 基本層序	21
2. 遺 構	21
(1) 1トレンチ	21
(2) 2トレンチ	21
(3) 3トレンチ	22
(4) 4トレンチ	24
3. 遺 物	25
4. 小 結	25
5. 石垣断面調査及び水中調査	26
(1) 石垣断面調査	26
(2) 水中調査	26
第5章 調査その3	30
1. 基本層序	30
2. 遺 構	30
(1) 5トレンチ	30
(2) 6トレンチ	32

3. 遺物	32
4. 小結	33
第6章 まとめ	34

図版目次

図版1	遺構	1	調査地遠景（南東から）
		2	外堀北石垣（西から）
図版2	遺構	1	調査その1 1トレンチ全景（東から）
		2	調査その1 1トレンチ土層断面（北東から）
図版3	遺構	1	調査その1 2トレンチ全景（南東から）
		2	調査その1 3トレンチ全景（西から）
		3	調査その1 4トレンチ全景（西から）
		4	調査その1 4トレンチ東壁（西から）
図版4	遺構	1	調査その2 1トレンチ全景（北から）
		2	調査その2 2トレンチ全景（北から）
図版5	遺構	1	調査その2 3トレンチ全景（北西から）
		2	調査その2 4トレンチ全景（北から）
図版6	遺構	1	調査その2 水中調査風景（西から）
		2	調査その2 ①地点付近の状況
図版7	遺構	1	調査その2 ③地点付近の状況
		2	調査その2 断面20地点付近の状況
図版8	遺構	1	調査その3 5トレンチ全景（東から）
		2	調査その3 6トレンチ全景（西から）

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：4,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査その1 1トレンチ調査前状況（西から）	4
図4	調査その1 4トレンチ調査前状況（西から）	4
図5	調査その2 1トレンチ調査前状況（西から）	4
図6	調査その3 6トレンチ調査前状況（東から）	4
図7	調査その1 作業風景（南西から）	4
図8	調査その2 作業風景（北から）	4
図9	調査その2 石垣オルソ測量風景（北西から）	4
図10	調査その2 石垣観測風景（西から）	4
図11	周辺調査位置図（1：4,000）	6
図12	調査その1 1トレンチ実測図（1：50）	11
図13	調査その1 2トレンチ実測図（1：50）	13
図14	調査その1 3トレンチ実測図（1：50）	14
図15	調査その1 4トレンチ平面図（1：50）	16
図16	調査その1 4トレンチ断面図（1：50）	17
図17	調査その2 1トレンチ実測図（1：50）	22
図18	調査その2 2トレンチ実測図（1：50）	23
図19	調査その2 3トレンチ実測図（1：50）	23
図20	調査その2 4トレンチ実測図（1：50）	24
図21	石垣観察及び実測地点図・水中観察地点図（1：800）	27
図22	石垣断面図（1：80）	28
図23	調査その3 5トレンチ実測図（1：50）	30
図24	調査その3 6トレンチ実測図（1：50）	31
図25	調査その3 6トレンチ石垣前面土管排水口（南から）	33
図26	調査その3 6トレンチ土管検出状況（北西から）	33
図27	土管出土状況模式図（1：40）	33

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	7
表2	調査その1 遺構概要表	9
表3	調査その1 遺物概要表	19
表4	調査その2 遺構概要表	21
表5	調査その2 遺物概要表	25
表6	外堀石垣の水中目視調査の結果について	29
表7	調査その3 遺構概要表	32
表8	調査その3 遺物概要表	32

史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡

第1章 調査経過

1. 調査に至る経緯

本調査は、元離宮二条城東側空間整備計画の一環として実施した苗圃改修工事に伴う調査ならびに外堀石垣の構造を確認することを目的として実施した発掘調査である。

調査地は元離宮二条城北西部の外堀付近で、調査は2015年から2016年にかけて3回実施した。2015年を調査その1、2016年前半を調査その2、後半を調査その3として報告する。

調査その1は外堀北側の苗圃、調査その2・その3は外堀北側の石垣である。調査地北側は竹屋町通、西側は美福通、南側は外堀となっており、当該地は史跡旧二条離宮、平安宮民部省・廩院・神祇官及び壬生大路・櫛笥小路の延長路に該当する。

調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「府文化財保護課」という）及び京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という）の指導のもと、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施し、適宜、府文化財保護課、市文化財保護課の臨検を受けた。

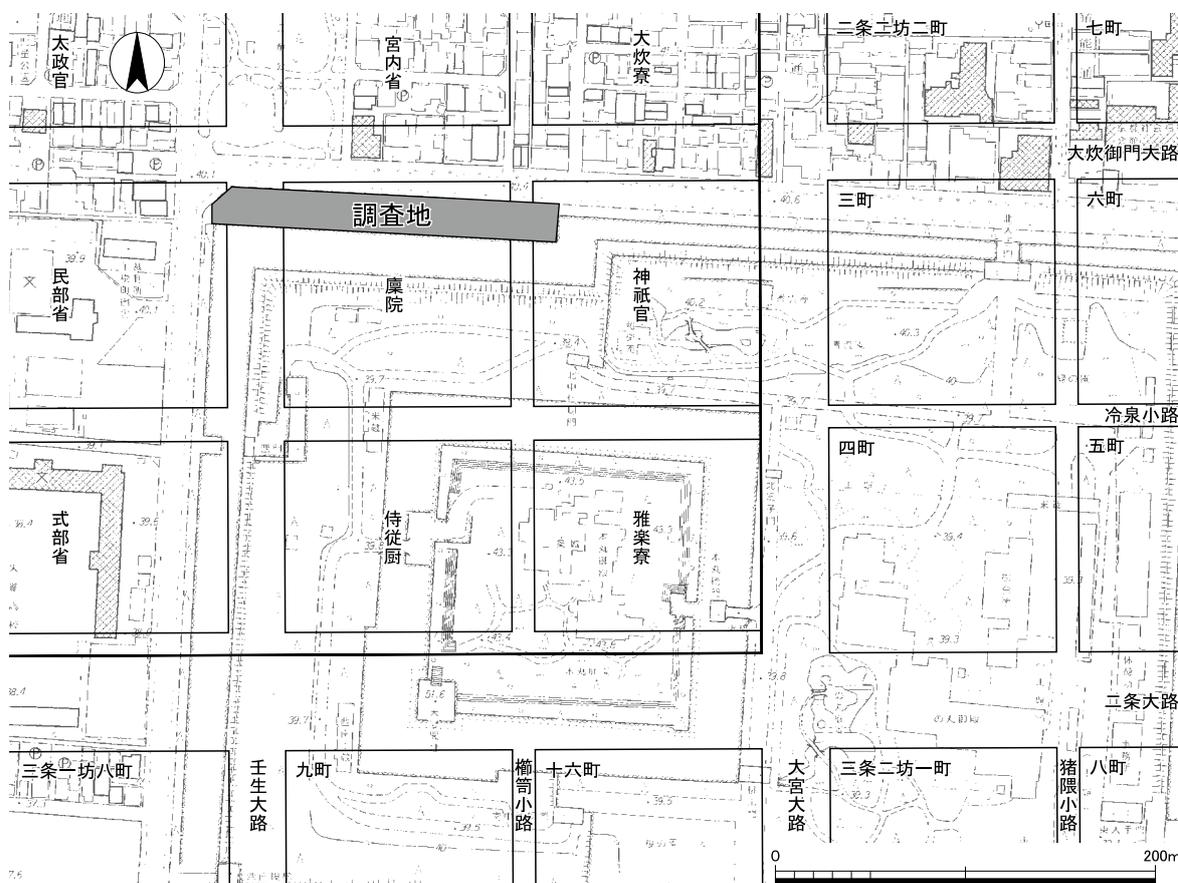


図1 調査位置図（1：4,000）

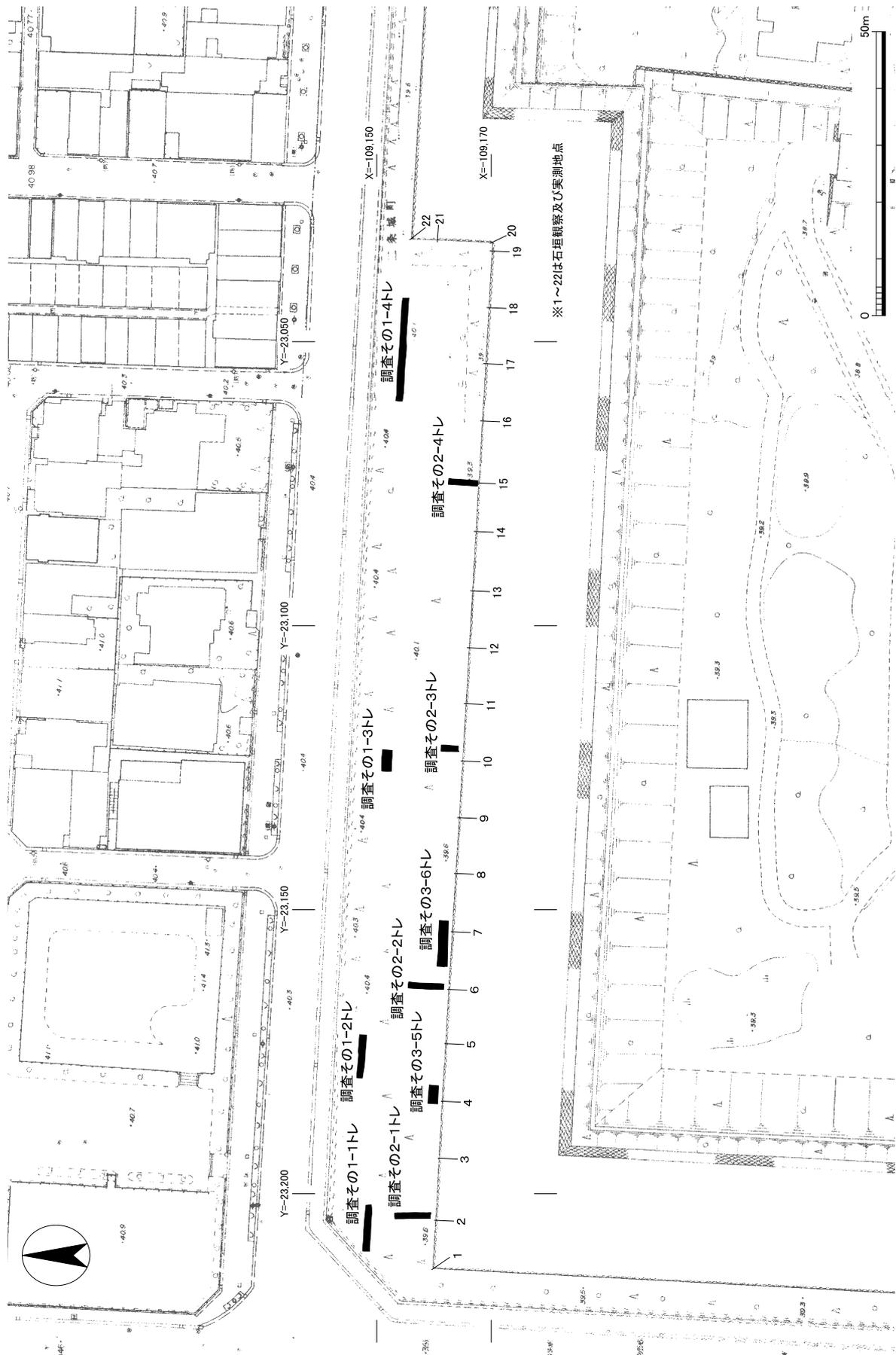


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

また、京都市元離宮二条城保存整備委員会（以下「保存整備委員会」という）の委員の方々の視察を各調査で受けた。

2. 調査の経過

調査は元離宮二条城（以下「二条城」という）外堀北西部の苗圃及び外堀北石垣付近で実施した。

調査その1 調査地は二条城の北西部、現在苗圃として利用されている松林内である。二条城及び下層遺構である平安宮の遺構の有無・内容・深さなど、整備に必要な基礎データを得ることを目的とした。調査区は4箇所設定し、西から1・2・3・4トレンチとした。調査は2015年5月18日から開始した。1トレンチは苗圃西端で、平安宮内南北大路（壬生大路延長路）西築地に相当する位置に南北1.0m、東西7.0mの調査区を設定した。2トレンチは、同じく東築地に相当する位置に南北1.0m、東西7.0mの調査区を設定した。3トレンチは、平安宮廩院跡に相当する位置に南北1.5m、東西3.0mの調査区を設定した。4トレンチは、平安宮内南北小路（櫛笥小路延長路）に相当する位置に南北1.0m、東西18.0mの調査区を設定した。すべての調査区とも、まず表土を重機により掘削し、その後は人力により遺構面の精査を行った。掘削残土は各調査区周辺に仮置きした。また、調査地の3箇所、検出した遺構面と南側の外堀及び北側竹屋町通の路面との関係を示す断面図を作成した。5月28日には保存整備委員会 記念物部会の尼崎博正部会長、29日には同会の鋤柄俊夫委員、6月18日には文化庁による視察を受けた。

調査その2 調査地は、二条城外堀の北西部、外堀北側の石垣で、外堀石垣の構造を確認することを目的として実施した。調査は、2016年4月18日から開始した。調査区は石垣の構造確認のため、石垣背面から南北方向に4箇所設定し、西から1・2・3・4トレンチとした。また、石垣の積み上げ角度の違いや歪みの有無などを記録するため、北西角から東へ10m置きに22箇所、垂直方向の断面図を作成した。さらに、堀にボートを配置し、目視による石垣の観察や写真撮影を行った。ボート乗船時にはライフジャケットを着用し、緊急時の救命用ロープなどの安全対策をとった。調査は表土及び近代以降の盛土を重機により掘削し、その後は人力により遺構面の精査を行った。掘削残土は各調査区周辺に仮置きした。市文化財保護課の指導により、2・4トレンチは遺構ならびに地山の確認のため、一部断割を実施した。調査終了後には遺構面を保護した後、埋め戻しを行った。2016年4月25日には鋤柄委員、5月2日には尼崎部会長、鋤柄委員、佐賀大学の宮武正登教授による視察を受けた。その後、6月24日には潜水による水中調査を実施した。

調査その3 本調査は、石垣裏込の構造を確認することを目的として実施した。調査は、2016年10月31日から開始した。調査その2での成果を踏まえ、石垣裏込の遺存状況の確認のため、石垣背面に2箇所の調査区を設定し、調査その2の継続として西から5・6トレンチとした。調査は表土から人力により掘削を行い、遺構面の精査を行った。掘削残土は各調査区周辺に仮置きし、取り外した栗石は残土とは別に仮置きした。調査終了後には栗石を戻し、検出した土管は土嚢で保護した後、埋め戻しを行った。11月4日には鋤柄委員、宮武教授による視察を受けた。



図3 調査その1 1トレンチ調査前状況(西から)



図4 調査その1 4トレンチ調査前状況(西から)



図5 調査その2 1トレンチ調査前状況(西から)



図6 調査その3 6トレンチ調査前状況(東から)



図7 調査その1 作業風景(南西から)



図8 調査その2 作業風景(北から)



図9 調査その2 石垣オルソ測量風景(北西から)



図10 調査その2 石垣観測風景(西から)

第2章 位置と環境

1. 歴史的環境と立地

調査地は、史跡旧二条離宮（二条城）及び平安宮跡にあたる。また、縄文時代から古墳時代の遺跡である聚楽遺跡や二条城北遺跡に近接する。

二条城は、徳川家康が慶長6年（1601）に築城に着手し、同8年（1603）に落成、同年に二条城で征夷大將軍の拝賀の儀を執り行っている。その後、寛永元年（1624）から三代將軍徳川家光により西側に城域が拡張され殿舎の整備が行われる。同3年（1626）に完成し、現在の二条城の姿となる。同年9月には後水尾天皇が行幸される。寛永11年（1634）に家光の入城後は、文久3年（1863）の徳川家茂入城までの約200年以上、徳川將軍の入城はない。またその間には落雷や大火、大地震などの災害により本丸や天守を失い、再建されることはなかった。家茂入城に際しては、荒廃していた城内の整備が行われる。慶応3年（1867）には、二の丸御殿大広間において、徳川慶喜による「大政奉還」が発せられる。これにより、二条城は徳川政権の終焉の場となった。

明治4年（1871）には、二の丸御殿内に京都府庁が置かれる。明治17年（1884）には二条離宮と改称、明治26～27年（1893～1894）には、桂宮御殿を本丸に移築するなどの大改変が行われる。大正4年（1915）の大正天皇即位の大典の際には、城内に大饗宴場が造営された。昭和2年（1927）には、北側にあった京都刑務所が移転し、跡地は翌年、大礼記念大博覧会第2会場¹⁾となった。

今回の調査地は二条城北西部で、寛永期の拡張部にあたる。数々の古絵図によると、「二条城外廻り」には四隅に番所が設置され、堀の外側であっても「二条城外廻り」として周辺町家とは厳然と仕切られており、今回の調査地も竹屋町通としては機能していないことがわかる。明治25年（1892）発行の地図³⁾においても、北側には竹屋町通は通っておらず、「二条城外廻り」は空閑地となっている。今回の調査地が位置する「二条城外廻り」北西部の南北幅は、享保2年（1717）の図では十七間半（31.815m）、元文元年（1736）書写の図では十九間二尺（35.148m）と記される。

昭和14年（1939）には二条離宮が京都市へ下賜され、翌年から一般公開される。同年、二の丸御殿が国宝に、その他22棟の建物が重要文化財に指定される。また、平成6年（1994年）には、ユネスコ世界遺産「古都京都の文化財」として登録された。

2. 既往の調査

二条城内では、これまでに20回以上の立会・試掘・確認・発掘調査が行われている。今回、1976年から当研究所が実施した二条城内の調査と二条城関連の遺構が検出された竹屋町通の調査を表と地点図にまとめた。

調査では、縄文時代から近代に至る各時代の遺構・遺物を検出している。二条城関連の遺構は、No.7では二条城西限の石垣・排水溝、No.8では江戸時代初期（慶長期）の南北方向の通路・側溝・柵列・蔵、No.10では江戸時代初期の石垣、江戸時代前期（寛永期）の後水尾天皇行幸にあたって整

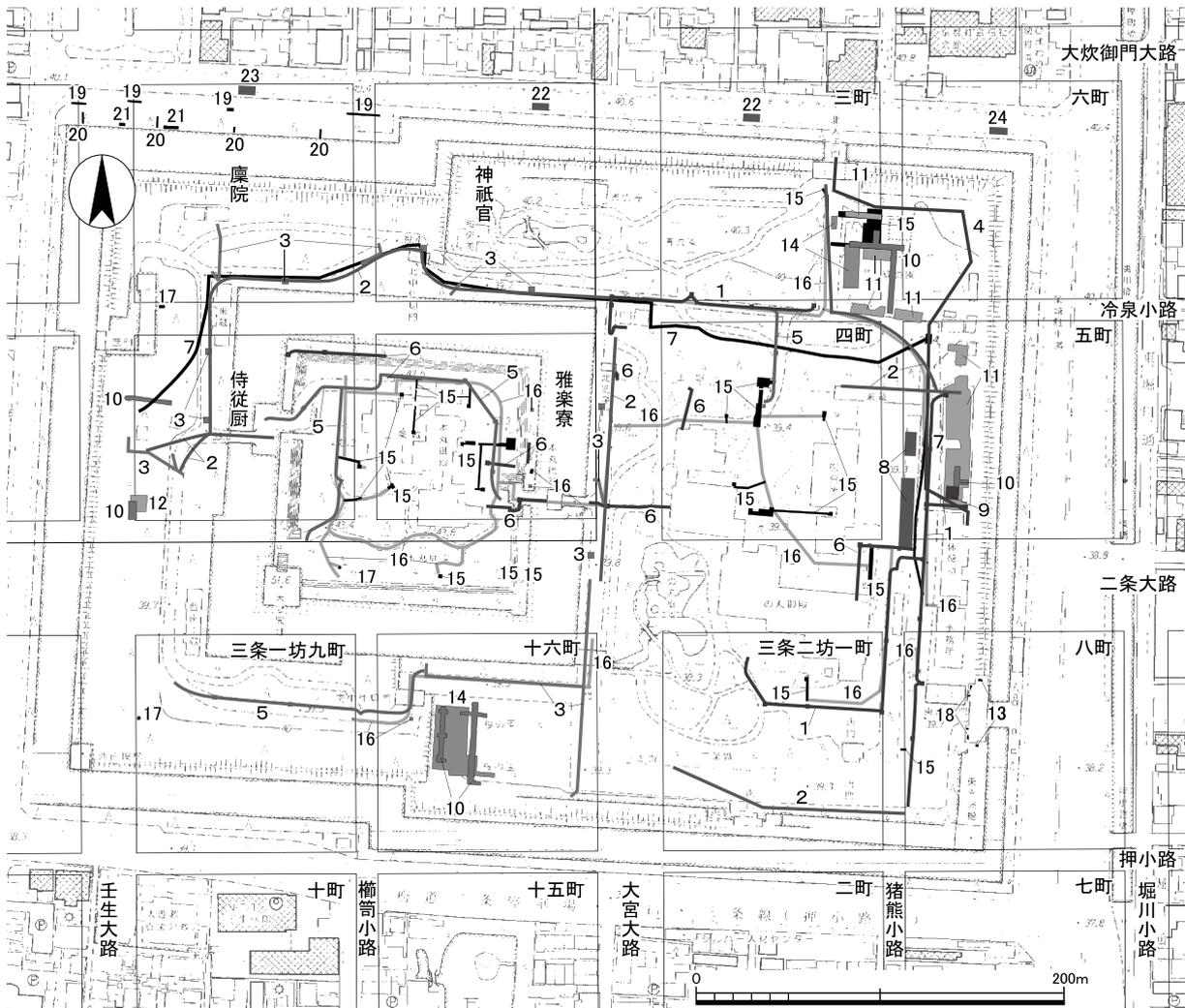


図11 周辺調査位置図 (1 : 4,000)

備された蔵跡、前期の整地層、中期から後期の土坑・柱穴などを検出している。No.11では江戸時代中期から後期の溝・井戸・石組遺構・瓦敷土間・柱穴・铸造遺構、No.13・18では東大手門築地塀（多門塀）を固定する石柱の状況を確認し、石垣裏込の栗石を検出した。No.14では寛永期の行幸御殿に付属する建物及び関連施設など、中期の石鳥居・石組・礎石などを検出している。No.15では二条城内各所において慶長期の造営、寛永期の大規模な増改築、天明の大火の痕跡など、二条城の変遷を実証する遺構・遺物を検出している。

二条城北側の竹屋町通でのNo.22～24では、江戸時代前期から近代の路面・側溝・柵・石列などを検出している。路面は、寛永期に整備され、大正年間まで修理・修築されている状況を確認した。

註

- 1) 『大禮記念京都大博覧會誌』京都市役所 1929年
- 2) 谷 直樹編『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本』思文閣出版 2003年
- 3) 『京都十五號（假製地形圖）』大日本帝國陸地測量部 1892年

表1 周辺調査一覧表

No.	調査方法	調査日	調査概要	文献
1	立会	1977.02.23～03.25	近世：遺物包含層。	1
2	立会	1977.04.16～04.26	近世：遺物包含層。江戸～明治：瓦溜、溝。	2
3	立会	1978.03.06～03.29	平安：瓦片。近世～現代：陶磁器。	3
4	立会	1979.03.12～04.07	平安後期：土器溜。平安末～鎌倉初：埋甕土坑。近世：石組暗渠。	4
5	立会	1980.02.13～03.17	江戸：瓦溜、緑石列、礎石、石組溝。	5
6	立会	1980.10.17～11.01	桃山：建物跡。	6
7	立会	1981.02.19～03.13	平安後期：土坑。中世：土坑。近世：石垣(二条城西限)、排水溝、焼土層、瓦溜。	7
8	発掘	1981.08.04～11.09	縄文晩期：自然流路(砂礫層)。平安前期：溝、猪熊小路東側溝、土坑。平安後期～室町：二条大路北側溝、土坑、井戸、溝、柱穴群。桃山～江戸：蔵跡、道路敷、側溝、柵列。	8
9	発掘	1983.02.01～02.16	平安後期：池状遺構。鎌倉～室町：柱穴、溝(南北に通る幅2～2.5m、深さ0.7m)。桃山～江戸：土坑、井戸、柱穴、暗渠。	9
10	試掘	2000.11.07～2001.03.30	冷泉院の池に伴う遺水・景石と創建期の二条城西堀東岸を確認。弥生中期：堅穴住居跡。平安前期～中期：池、池堆積層、溝、整地層。平安後期：溝、井戸、整地層、池堆積層。室町後期：土坑、井戸、整地層、溝。桃山：柱穴、溝、石垣、堀、堆積土坑。江戸前期：整地層、雨落溝、礎石据付跡、地業、溝。江戸中期～後期：土坑、柱穴、溝、整地層。	10
11	発掘・試掘	2001.10.01～2002.03.29	平安前期～中期：池堆積土、州浜、汀線、盛土、列石、炭層、景石、池陸部。平安後期：盛土、景石、池堆積土、汀線、溝、井戸、柱穴、土坑。鎌倉～室町：池堆積土、溝、土坑、柱穴。室町後期：柱穴、土坑、整地土、井戸、溝。桃山：溝。江戸前期：柱穴、土坑。江戸中期～後期：土坑、井戸、柱穴、溝、建物、石敷、瓦敷土間。	11
12	発掘	2002.09.02～09.27	平安後期：ピット。室町後期：落込、溝。江戸：整地層、土坑。	12
13	確認	2008.01.28～02.01	江戸：東大手門石垣。近代以降：東大手門築地塀(多門塀)控え柱(石柱)。	13
14	確認	2009.09.07～11.04	(緑の園) 江戸初期：整地層。江戸前期：建物礎石柱穴列、柱穴、溝、石列、整地層、根石群。江戸中期：石鳥居、石組、集石、礎石、溝、土坑、柱穴。江戸後期：土間、柱穴、土坑。近代：溝。 (桜の園) 江戸後期：土坑。	14
15	確認	2009.11.01～2010.01.27	平安：池。江戸初期～前期：建物、溝、木樋、土坑、柱穴、路面、整地層。江戸中期～後期：土坑、柱穴。近代：柱穴。	15
16	立会	2010.06.14～12.14	江戸：整地層、盛土、石列、礎石、瓦溜り。	—
17	発掘	2010.09.06～09.17	江戸：整地層、路面、石列、瓦溜り。	16
18	発掘	2014.11.17～11.28	江戸：東大手門礎石、石垣裏込。近代以降：東大手門多門塀控え石柱。	17
19	発掘	2015.05.18～06.04	平安：溝、杭跡、柱穴、落込み。鎌倉～室町：土坑、ピット、溝、遺物包含層。江戸：整地層。近代：整地層、土坑。	本報告
20	発掘	2016.04.18～05.11、06.24	平安：遺物包含層。鎌倉～室町：遺物包含層。江戸：整地層・石垣裏込。近代：道路側溝。	本報告
21	発掘	2016.10.31～11.15	江戸：整地層、石垣裏込。近代：土管	本報告
22	発掘	2002.07.03～09.18	(A区) 平安前期：ピット、整地層。平安中期～後期：ピット、柱穴列、整地層、溝。室町：土坑。江戸前期～後期：溝、路面、柵。江戸後期～明治・大正：路面、溝、柵。 (B区) 鎌倉：井戸。桃山：溝、土坑。江戸：路面、溝、ピット群。	18
23	発掘	2004.09.13～11.08	桃山～江戸初期：土取穴、整地層、溝、路面、柱穴。江戸前期～後期：路面、建物、溝、石列、柱列。江戸末以降：溝、土坑、路面。	19
24	発掘	2006.01.06～03.01	平安：柱穴、土坑、溝。鎌倉～江戸初期：土坑、柱列。江戸前期～末期：路面、落込。江戸末期～明治・大正：路面、溝、柵列。	20

文献

- 1 「表2-1」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 2 「付章22 宮南東部」『平安宮Ⅰ 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 3 「付章26 宮南東部」『平安宮Ⅰ 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 4 「表2-3」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 5 「表2-8」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 6 「表2-6」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 7 「表2-7」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 8 「左京二条二坊(3) 史跡二条城」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 9 「左京二条二坊(3) 史跡二条城」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 10 「平成12年度の試掘確認調査」『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 11 「平成13年度の発掘・試掘確認調査」『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 12 『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 13 「史跡旧二条離宮」『平成19年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 14 『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 15 『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 16 『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 17 『重要文化財二条城 東大手門 修理工事報告書 第九集』元離宮二条城事務所 2017年
- 18 『史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮神祇官・平安京冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 19 『史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮廩院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 20 『史跡旧二条離宮(二条城)・平安京冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年

第3章 調査その1

1. 基本層序

最も西側の1トレンチを基に基本層序を述べる。上層から現代盛土約0.3m、路面整地層Ⅰ（昭和期）約0.15m、路面整地層Ⅱ（明治・大正期）約0.2m、整地層Ⅲ（江戸時代）約0.15m、整地層Ⅳ（江戸時代前期）約0.3m、遺物包含層Ⅴ（平安時代から中世）約0.1mとなる。

なお、整地層及び遺物包含層に関しては全てのトレンチにわたるので、調査その2、調査その3とともに、共通の番号Ⅰ～Ⅴを振った。

路面整地層Ⅰは3層を単位とした固く締まる整地層で、最上層の黒褐色砂泥層はアスファルトを含み、上面は硬化して平坦面を作る。

路面整地層Ⅱは4層を単位とした固く締まる整地層で、最上層の黒褐色砂泥層上面は硬化して平坦面を作る。炭ガラ・コルタール・レンガ片・ガラス片を含む。

整地層Ⅲは固く締まる黒褐色～暗褐色の粘質土層で形成される。上面は硬化して平坦面を作る。2・3トレンチでは上面は明赤褐色を呈する。

整地層Ⅳは礫を多く含む暗褐色～にぶい黄褐色の砂泥を中心とする層である。1・3・4トレンチでは粘質土と礫を多量に含む砂泥を互層に積む。この層は厚い所で0.5mの厚さがある。

遺物包含層Ⅴは褐色砂泥を中心とする層で、この層の厚さは0.05～0.4mある。平安時代から中世の遺物を含む。4トレンチでは古墳時代の土器が混入する。

調査区の現地表面の標高は、1トレンチが40.05m、2トレンチが40.30m、3トレンチが40.10m、4トレンチが40.20mである。地山検出面の標高を比較すると、3トレンチがやや低くなるが概ね38.90mである。

検出した遺構には、平安時代から近代のものがある。

以下、調査区ごとに概要を記す。遺構の番号に関してはトレンチごとに、1トレンチは100番代、2トレンチは200番代、3トレンチは300番代、4トレンチは400番代とした

表2 調査その1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	溝106・107・407・408・420、ピット105・108～110、落込み424	
鎌倉時代 ～室町時代	土坑104・203・405・406、柱穴301・303、ピット201・202・302・402・410・418・421・422、溝304・401、落込み425、遺物包含層Ⅴ	
江戸時代	溝103、整地層Ⅲ・Ⅳ	
近現代	路面整地層Ⅰ・Ⅱ、土坑417	

2. 遺 構

(1) 1 トレンチ (図12、図版2)

主な遺構には、近現代の路面整地層、江戸時代の整地層・溝、室町時代の土坑、平安時代の溝・杭跡などがある。

近現代

近現代に属する遺構として、路面整地層がある。

路面整地層Ⅰは調査区西部、現代盛土層の下で検出した(図12-8~10層)。固く締まる黒褐色砂泥層(8層)が厚さ0.04~0.08mあり、硬化して平坦面を作る。この層の下には、粘質の明黄褐色砂泥層(9層)、礫を多量に含む暗褐色砂泥層(10層)が水平に敷かれる。8層は路面の舗装、9・10層は舗装のための整地層で、この3層を1つの単位とする路面整地層となる。アスファルトを含む。路面整地層Ⅱは調査区西部、整地層Ⅰの下で検出した(図12-11~14層)。固く締まる黒褐色砂泥層(11層)が厚さ0.05~0.1mあり、硬化して平坦面を作る。この層の下には、粘質のにぶい黄褐色砂泥層(12層)、黒褐色砂泥層(13層)、礫の混じる暗褐色砂泥層(14層)が水平に敷かれる。11層は路面の舗装、12~14層は舗装ための整地層で、この4層を1つの単位とする路面整地層となる。11層には炭ガラ・コールタール、12~14層にはレンガ片・ガラス片を含む。

江戸時代

江戸時代に属する遺構として、整地層・溝がある。

整地層Ⅲは調査区西部、路面整地層Ⅱの下(現地表下0.67m)で検出した(図12-15・16層)。固く締まる黒褐色粘質土層である。厚さ0.04~0.06mで、上面は硬化して平坦面を作る。整地層Ⅳは調査区の西半部で検出した。礫を多く含む暗褐色~にぶい黄褐色の砂泥層である(図12-18~23層)。厚さは約0.35mある。なお、東半部では、この整地層は現代に大きく攪乱を受けている。

溝103 調査区中部西寄り、整地層Ⅳの上面で検出した南北方向の溝である。幅0.45m、深さ0.4m。南と北は調査区外へ延長する。底部の標高は38.96mである。埋土は礫の混じる灰黄褐色砂泥である。

室町時代

室町時代に属する遺構として、土坑がある。整地層Ⅳを除去した地山の上面で検出した。

土坑104 調査区中央北部で検出した。検出面での規模は東西1.65m、南北0.55m以上、深さ0.24mの半円形の土坑である。北は調査区外へ延長する。底部の標高は38.74mである。埋土は瓦・礫の入る黒褐色砂泥で、底部に人頭大の自然石が入る。室町時代後半の土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器が出土した。

平安時代

平安時代に属する遺構として、溝・杭跡がある。すべて地山の上面で検出した。

溝107 調査区東端部で検出した南北方向の溝である。幅1.4m以上、南と北は調査区外へ延長

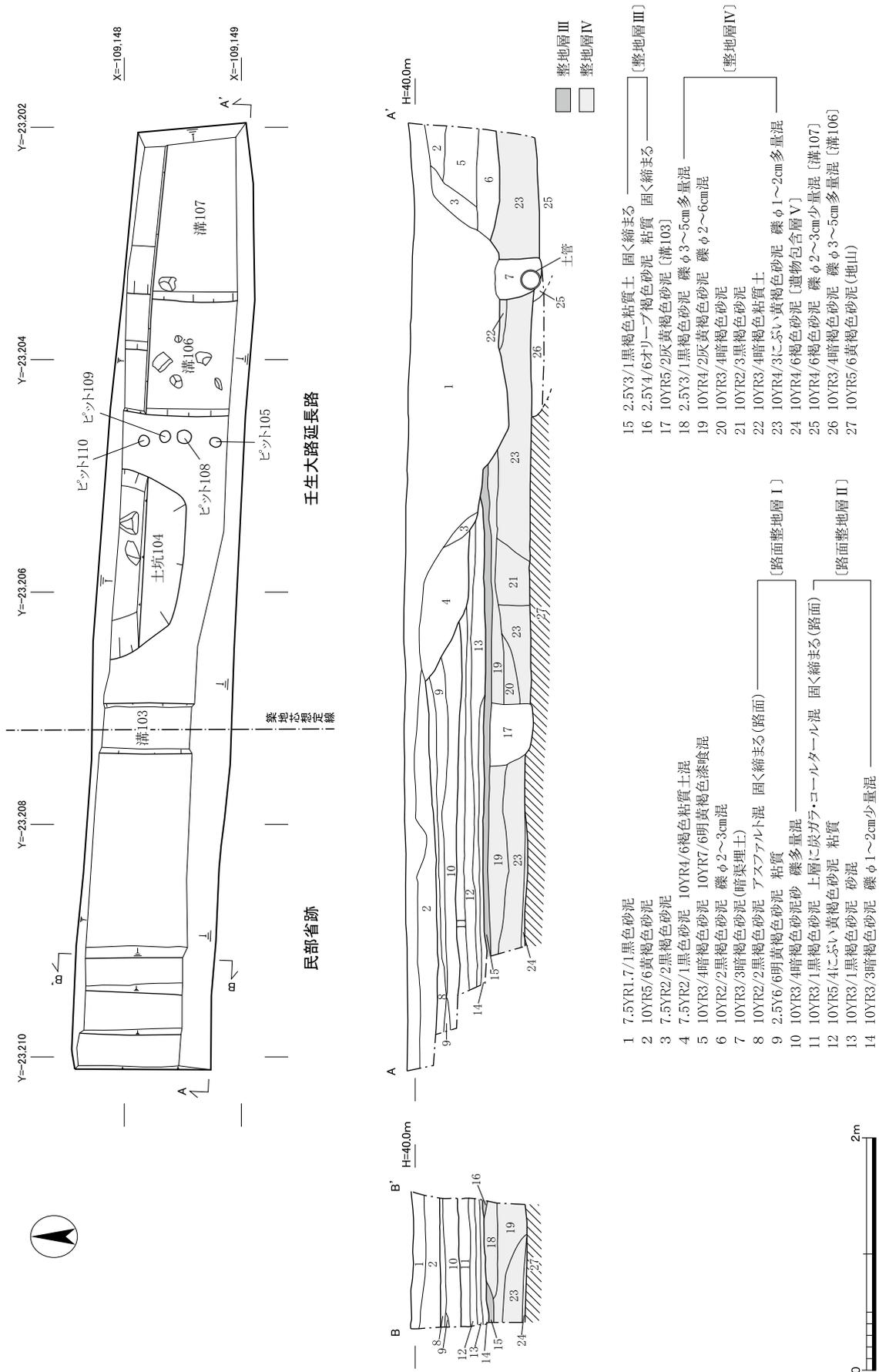


図12 調査その1 1トレンチ実測図(1:50)

する。断割部で検出した底部の標高は38.66mで、検出面からの深さは0.34mとなる。埋土は礫の混じる褐色砂泥で、平安時代の瓦類の他に平安時代後期の土師器・須恵器が出土した。

溝106 調査区東部で検出した南北方向の溝である。幅1.05m以上、東肩は溝107により攪乱を受け、南と北は調査区外へ延長する。断割部で検出した底部の標高は38.70mで、検出面からの深さは0.3mとなる。埋土は暗褐色砂泥で、平安時代の瓦類の他に、平安時代前期から中期の土師器・須恵器・黒色土器が出土した。

ピット105・108・109・110 溝106の西側で検出した。径0.08～0.1mの杭跡が4基、南北に並ぶ。完掘していないので深さは不明であるが、埋土は粘質の褐色砂泥である。遺物の出土はなかった。

(2) 2トレンチ (図13、図版3)

主な遺構には、近現代の路面整地層、江戸時代の整地層、室町時代の土坑・ピットなどがある。なお、地山面まで掘り下げ、北側を断ち割ったが、平安時代及びそれ以前の遺構は確認できなかった。

近現代

近現代に属する遺構として、路面整地層がある。

路面整地層Ⅱは調査区全域、現代盛土層の下で検出した。非常に堅く締まる暗褐色砂礫層である(図13-4層)。厚さ0.08～0.12m。この層は1トレンチで検出した路面整地層Ⅱの最下層(図12-14層)に相当する。

江戸時代

江戸時代に属する遺構として、整地層がある。

整地層Ⅲは調査区全域、路面整地層Ⅱの下(現地表面下0.8m)で検出した。固く締まる黒褐色粘質土層である(図13-5層)。厚さ0.04～0.10m。上面は明赤褐色粘質土で固く締まり、平坦面を作る整地層である。整地層Ⅳは調査区全域、整地層Ⅲの下で検出した。礫を多く含むにぶい黄褐色砂泥及びオリブ褐色砂泥層である(図13-6・7層)。厚さ0.15～0.25mある。

室町時代

室町時代に属する遺構として、土坑・ピットがある。

土坑203 調査区中央北壁断面で確認した。整地層Ⅳの下で検出した。検出面での東西幅は0.75m、南北は不明。深さは0.4mである。焼土層と炭層が互層となる。

ピット201・202 調査区西側、地山上面で検出した。ピット201は径0.3mの円形、ピット202は一辺約0.3mの隅丸方形である。埋土はともに暗褐色砂泥。ピット201から、室町時代の土師器や瓦器の小片が出土した。

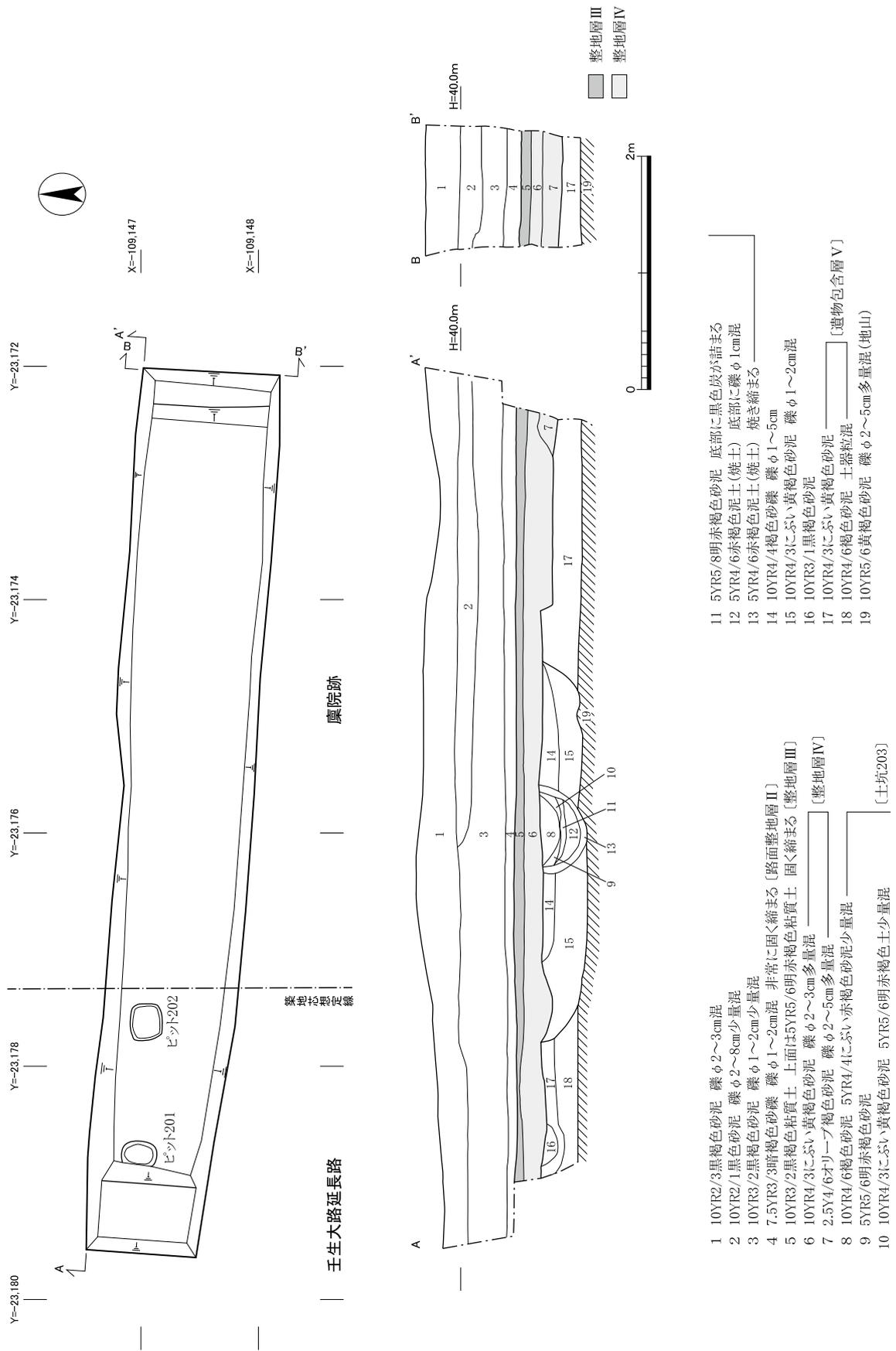


図13 調査その1 2トレンチ実測図 (1:50)

- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR2/3黒褐色砂泥 礫φ2~3cm混
 2 10YR2/1黒色砂泥 礫φ2~8cm少量混
 3 10YR3/2黒褐色砂泥 礫φ1~2cm少量混
 4 7.5YR3/3暗褐色砂泥 非常に固く締まる [路面整地層II]
 5 10YR3/2黒褐色粘質土 上面は5YR5/6明赤褐色粘質土 固く締まる [整地層III]
 6 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 礫φ2~3cm多量混
 7 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 礫φ2~5cm多量混
 8 10YR4/6褐色砂泥 5YR4/4にぶい、赤褐色砂泥少量混
 9 5YR5/6明赤褐色砂泥
 10 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 5YR5/6明赤褐色土少量混</p> | <p>11 5YR5/8明赤褐色砂泥 底部に黒色炭が詰まる
 12 5YR4/6赤褐色泥土(焼土) 底部に礫φ1cm混
 13 5YR4/6赤褐色泥土(焼土) 焼き締まる
 14 10YR4/4褐色砂泥 礫φ1~5cm
 15 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 礫φ1~2cm混
 16 10YR3/1黒褐色砂泥
 17 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥
 18 10YR4/6褐色砂泥 土器粒混 [遺物包含層V]
 19 10YR5/6黄褐色砂泥 礫φ2~5cm多量混(地山)</p> |
|---|---|

(3) 3トレンチ (図14、図版3)

主な遺構には、江戸時代の整地層、鎌倉時代から室町時代の溝・ピット・柱穴・遺物包含層などがある。

江戸時代

江戸時代に属する遺構として、整地層がある。

整地層Ⅲは調査区全域、現代盛土層の下（現地表面下0.62m）で検出した。固く締まる暗褐色粘質土層である（図14-5・6層）。厚さ0.1~0.3m。上面には明赤褐色砂泥で固く締め、平坦面を作る箇所もある路面整地層である。整地層Ⅳは調査区全域、整地層Ⅲの下で検出した。礫を多量に含む褐色系砂泥層である（図14-7~10層）。固く締まる。厚さ0.15~0.2mある。

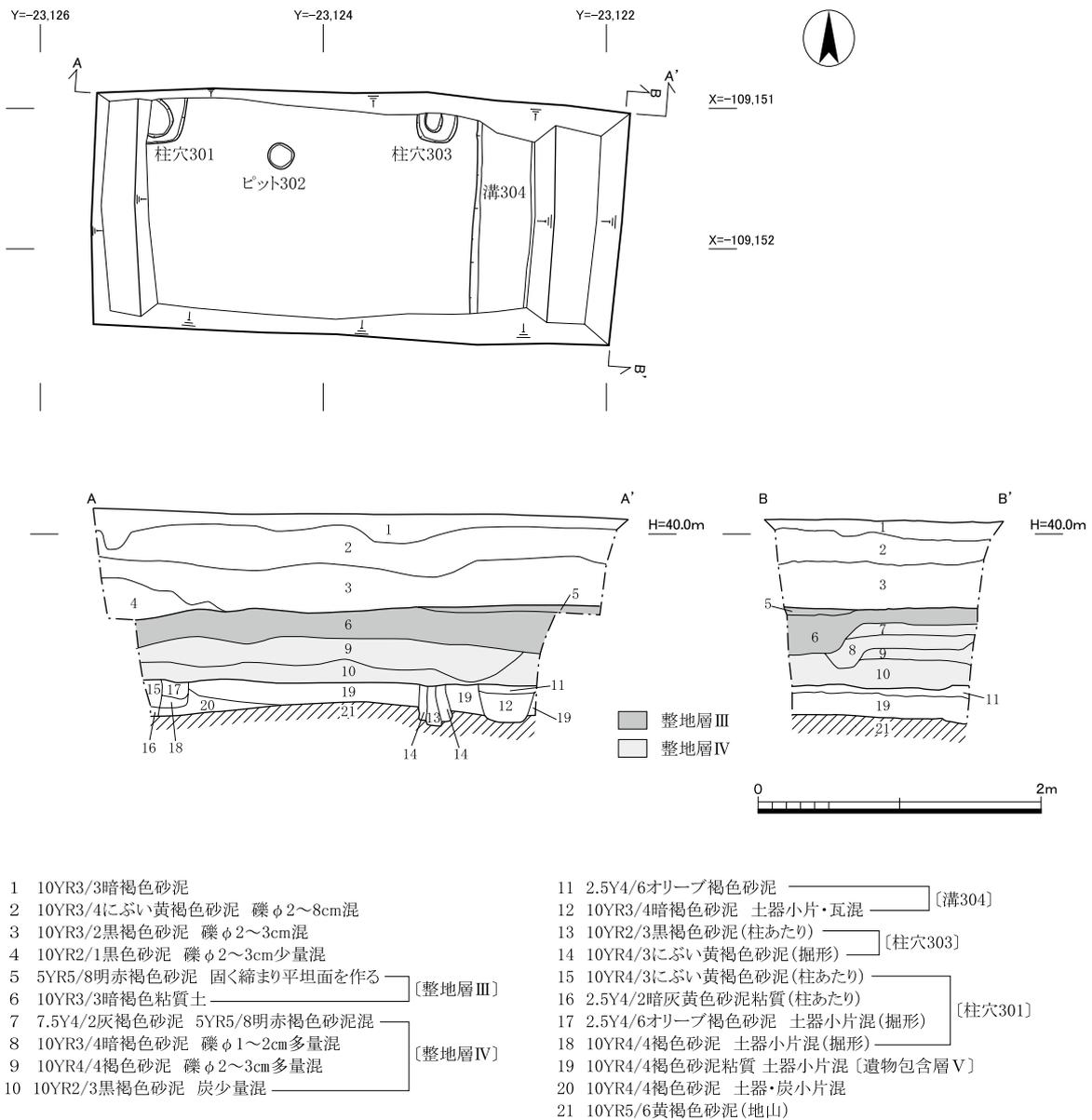


図14 調査その1 3トレンチ実測図 (1:50)

鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代から室町時代に属する遺構として、溝・ピット・柱穴・遺物包含層がある。

遺物包含層Ⅴは粘質の褐色砂泥層である（図14-19層）。

溝304 調査区東端で検出した。幅0.4m、深さ0.2mの南北溝である。埋土は暗褐色砂泥で、底部の標高は38.64mである。平安時代末期から鎌倉時代初期の東播系須恵器甕、瓦などが出土した。

ピット302 調査区中央で検出した。径0.2mの円形で埋土はにぶい黄褐色砂泥。室町時代の土師器小片が出土した。

柱穴301 調査区北西隅で検出した。掘形は一辺0.3m以上の隅丸方形で、埋土は褐色系砂泥、柱あたりは径0.25mの円形で、埋土はにぶい黄褐色～暗灰黄色の砂泥。平安時代の瓦が出土した。

柱穴303 調査区北部、遺物包含層の上面で検出した。掘形は一辺0.3m以上の隅丸方形で、埋土はにぶい黄褐色砂泥、柱あたりは径0.2mの円形で、埋土は黒褐色砂泥。出土遺物はなかった。柱穴301との芯々距離は2.0mである。

(4) 4トレンチ（図15・16、図版3）

主な遺構には、近代の土坑、江戸時代の整地層、鎌倉時代から室町時代の土坑・ピット・溝・落込み・遺物包含層、平安時代の溝・落込みなどがある。南東隅の攪乱坑は、平成23年発行『重要文化財二条城調査工事報告書』掲載のボーリング調査孔No.D771となる。なお、古墳時代の須恵器が土坑405、また古墳時代（庄内期）の土器が遺物包含層Ⅴから出土した。

近代

近代に属する遺構として土坑がある。

土坑417 調査区中央部南寄り、近・現代攪乱層の下層で検出した。近代の棧瓦を多く含む。

江戸時代

江戸時代に属する遺構として、整地層がある。

整地層Ⅲは調査区全域、現代盛土層の下（現地表面下0.8m）で検出した。固く締まる暗褐色粘質土層である（図16-5層）。厚さ0.1～0.25mある。上面は硬化して平坦面を作る路面整地層である。この層は東部に行くに従い厚くなるが、下層に礫が混ざる。整地層Ⅳは調査区全域、整地層Ⅲの下で検出した。礫を多く含む褐色砂泥及びにぶい黄褐色砂泥層である（図16-6・7層）。固く締まる。厚さ0.2～0.5mある。

鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代から室町時代に属する遺構として、土坑・ピット・溝・落込み・遺物包含層がある。

遺物包含層Ⅴは調査区西側、整地層Ⅳと地山面との間で検出した。粘質の暗褐色砂泥層である（図16-24・25層）。厚さ0.15～0.18mある。瓦小片の他に庄内期の土器小片が混入して出土した。

土坑405 調査区中央北部で検出した。検出面での規模は東西1.2m、南北0.75m以上、深さ0.55mの半円形の土坑である。北は調査区外へ延長する。底部の標高は38.48mである。埋土は瓦・炭の入る褐色～暗褐色砂泥で、底部に人頭大の自然石が入る。平安時代の土師器小片・平瓦・丸瓦・

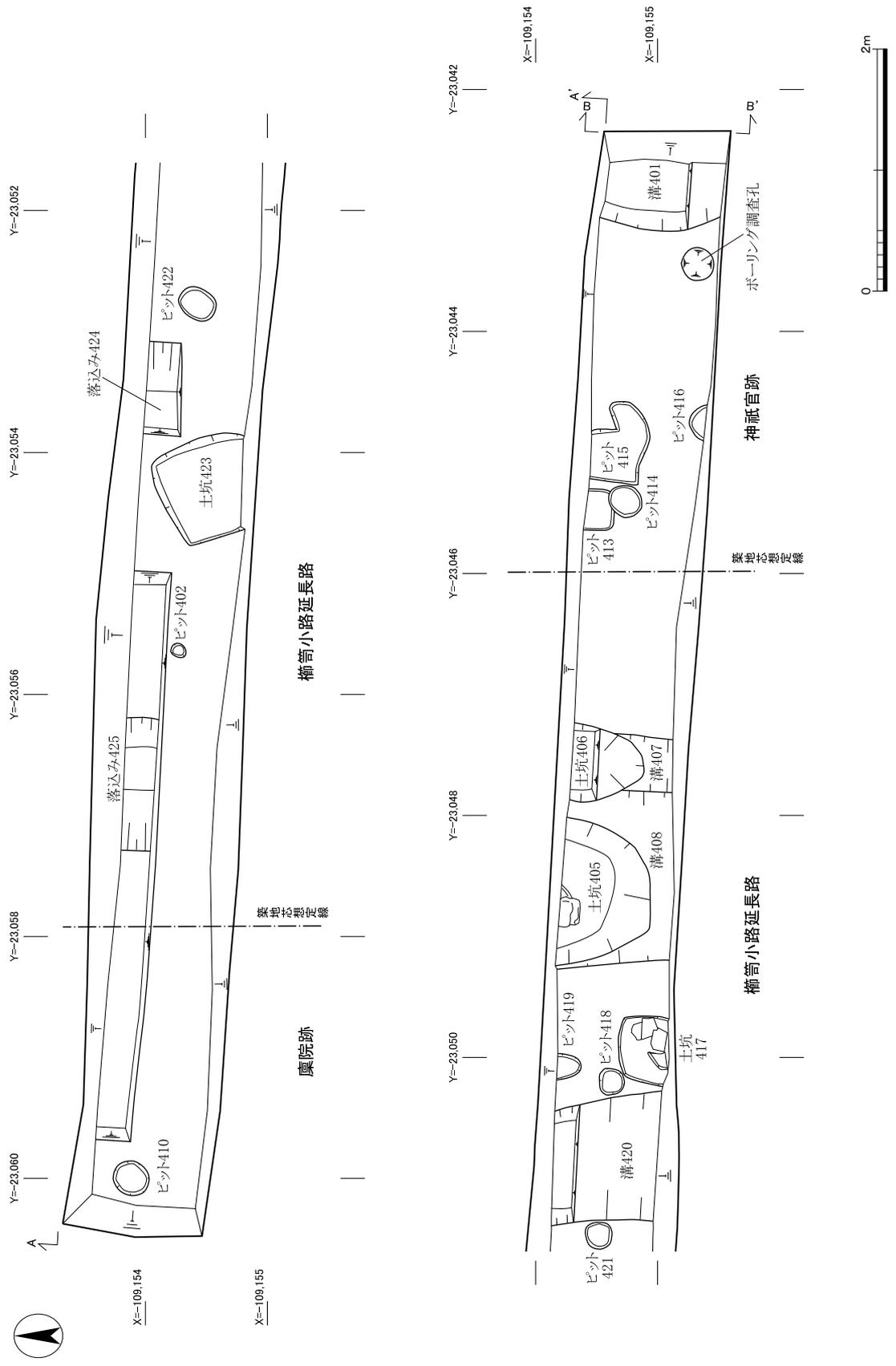


図15 調査その1 4トレンチ平面図 (1 : 50)

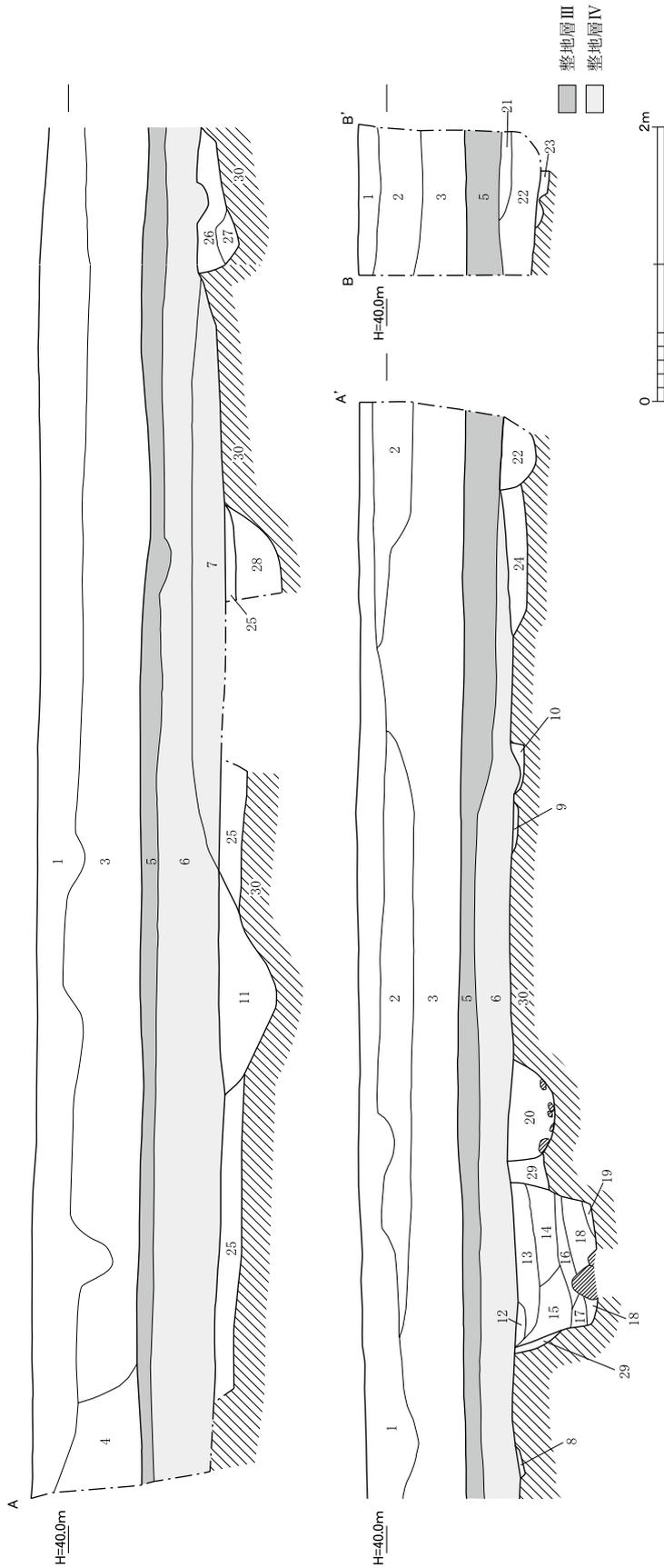


図16 調査その1 4トレンチ断面図 (1:50)

- | | | |
|--------------------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 10YR3/3暗褐色砂泥 礫φ2~5cm混 | 11 10YR3/3暗褐色砂泥 礫φ2~3cm少量混 [落込み425] | 21 10YR3/3暗褐色砂泥 礫φ1~2cm混 |
| 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 礫φ3~5cm、アスファルト混 | 12 7.5YR3/3暗褐色砂泥 | 22 7.5YR3/4暗褐色砂泥 固く締まる 軒瓦多量混 [溝401] |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥 礫φ3~5cm混 | 13 10YR4/4褐色砂泥 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥混 | 23 10YR3/4暗褐色砂泥に5YR5/8明赤褐色焼土粒と炭多量混 |
| 4 10YR3/1黒褐色砂泥 礫φ3~5cm混 | 14 10YR3/4暗黄褐色砂泥 10YR5/6黄褐色砂泥混 | 24 10YR3/4暗褐色砂泥 土器・炭少量混 [遺物包含層V] |
| 5 10YR3/4暗褐色粘質土 固く締まり平坦面を作る (整地層III) | 15 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 10YR5/6黄褐色砂泥混 | 25 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 |
| 6 10YR4/4褐色砂泥 礫φ2~5cm多量混 | 16 10YR3/3暗褐色砂泥 やや粘質 瓦・土器混 | 26 10YR4/4褐色砂泥 土器小片・炭混 [溝420] |
| 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 | 17 10YR5/6黄褐色粘質土 10YR3/3暗褐色砂泥混 | 27 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 |
| 8 10YR3/3暗褐色砂泥 [ピット419] | 18 10YR3/4暗褐色砂泥 10YR5/6黄褐色粘質土・炭混 | 28 7.5YR3/3暗褐色砂泥 土器小片・炭混 [落込み424] |
| 9 7.5YR3/3暗褐色砂泥 [ピット413] | 19 10YR2/3黒褐色砂泥 粘質 | 29 10YR3/4暗褐色砂泥 やや粘質 [溝408] |
| 10 10YR4/4褐色砂泥 土器・炭少量混 [ピット415] | 20 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 礫φ2~3cm少量混 [土坑406] | 30 10YR5/4黄褐色砂泥 (地山) |

軒平瓦などの他、古墳時代（5世紀）の須恵器甕が出土した。

土坑406 調査区中央北部で検出した。検出面での規模は東西1.2m、南北0.75m以上、深さ0.55mの半円形の土坑である。北は調査区外へ延長する。底部の標高は38.48mである。埋土は礫の少量混じるにぶい黄褐色砂泥で、底部に径5～10cmの自然石が入る。出土遺物はなかった。

ピット402・410・418・421・422 調査区西半で検出した。径0.2～0.3mの円形ピットである。ピット418・421・422は1.4m間隔で並ぶ。この柱筋は東端のピット410まで延長する可能性も考えられたが、410と402の間にはピットは検出しなかった。ピット410からは時期不明の土師器小片が出土した。

溝401 調査区東端で検出した。幅0.55m以上、深さ0.25mの南北溝である。南と北は調査区外へ延長する。底部の標高は38.9m、埋土は暗褐色砂泥で固く締まる。平安時代後期の軒丸瓦・軒平瓦が出土した。

落込み425 調査区北西部、断割部で検出した。東西1.6m以上、深さ0.4m。埋土は礫が少量混じる暗褐色砂泥で、底部の標高は38.50mである。

平安時代

平安時代に属する遺構として、溝・落込みがある。

溝407 調査区中央で検出した。幅0.45m以上の南北溝である。南と北は調査区外へ延長する可能性がある。深さは不明で、西接する溝408により攪乱を受ける。埋土は暗褐色砂泥である。出土遺物はなかった。

溝408 調査区中央で検出した。幅1.4m、深さ0.3mの南北溝である。南と北は調査区外へ延長する。底部の標高は38.74m、埋土はやや粘質の暗褐色砂泥である。出土遺物はなかった。

溝420 調査区中央で検出した。幅1.0m、深さ0.3mの南北溝である。南と北は調査区外へ延長する。底部の標高は38.76m、埋土は褐色～にぶい黄褐色砂泥である。出土遺物はなかった。

落込み424 調査区北西部、断割部で検出した。東西0.7m以上、深さ0.3m。埋土は土器片・炭片を含む暗褐色砂泥で、底部の標高は38.45mである。

3. 遺物

出土遺物は整理箱に6箱出土した。遺物内容としては、約8割が瓦類で他は土器類である。時代別では、平安時代の瓦が多い。土器類には、各時代のものがあり、古墳時代の土器も少量ある。

古墳時代 4トレンチ遺物包含層Vから、磨滅しているが庄内期とみられる土器が2片出土した。また、土坑405から古墳時代の須恵器甕の口縁部が出土した。にぶい赤褐色を呈し、外面には櫛描波状文が施される。

平安時代 土器類には、土師器・須恵器・黒色土器がある。溝106からは平安時代前期から中期の土師器・須恵器・黒色土器、溝107からは平安時代後期の土師器が出土した。瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。各遺構から出土したほか、溝401からは平安時代後期の山城産軒丸瓦が5個体、軒平瓦が4個体、まとまって出土した。軒瓦には三つ巴文の他に蓮弁を剣頭状

表3 調査その1 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器				
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦				
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器				
江戸時代	染付、施釉陶器				
近代	染付、磁器、施釉陶器、丸瓦、平瓦、棧瓦、ガラス片、鉄釘				
合計		6箱	0点(0箱)	6箱	0箱

に作る蓮華文軒丸瓦がある。

鎌倉時代 土器類には、溝304から出土した東播系の須恵器甕がある。

室町時代 土器類には、土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器などがある。土坑104からは室町時代後半の土師器・須恵器の他に、瓦器羽釜が出土した。羽釜には口縁部2箇所径0.5cmの孔を穿つ。他にピット201から瓦器羽釜小片、ピット302から土師器小片が出土した。

江戸時代 土器類には、染付・施釉陶器があるが、極小片で量も非常に少ない。

近代 土器類には、染付・磁器・施釉陶器がある。瓦類には、丸瓦・平瓦・棧瓦などがある。他にはガラス片、鉄釘などがある。土坑417からは近代の棧瓦がまとまって出土した。

4. 小 結

今回の調査では、平安時代から近代までの遺構を検出することができた。以下に時代順に成果をまとめる。

平安時代については、1トレンチと4トレンチで南北溝を検出した。1トレンチでは平安宮内大路（壬生大路延長路）西側溝推定地に相当する位置で溝106を検出した。9世紀の遺物を含むことから、この溝106は平安宮内大路西側溝（民部省外溝）である可能性が高い。なお、この溝に重複する溝107は出土する遺物が10世紀ごろのものであり、溝106の造り替えと考えることができる。4トレンチでは平安宮内小路（櫛笥小路延長路）東側溝推定地に相当する位置で溝408を検出した。9世紀の遺物を含むことから、この溝408は平安宮内小路東側溝（神祇官外溝）である可能性が高い。この溝の西で溝420を検出しているが、遺物には平安時代後期のものが含まれ、溝408の造り替えと考えられる。また、溝401は検出地点や出土する遺物に平安時代中期の瓦を多く含むことなどから神祇官内溝と考えられる。その他の平安宮内条坊路推定地においては、当該する遺構はみつからなかった。4トレンチで検出した落込み424は土取り穴と考えられる。

鎌倉時代から室町時代の遺構については、土坑やピット・溝を各トレンチで、柱穴を3トレンチ

で検出している。1トレンチでは土坑104、4トレンチでは土坑405・406などがある。当初は井戸を想定したが、底部は浅く、挿鉢状となっており土取り穴と考えられる。2トレンチ断面で検出した土坑203は炉である可能性がある。3トレンチでは南北溝304を検出したが、性格については不明である。3トレンチで検出した柱穴301・303は芯々の距離が2.0mであった。同一建物の柱穴であるかどうか、またどのように展開するかについては不明である。

江戸時代の遺構については、粘質土と礫を多く含む砂泥を互層に積む整地層Ⅳ、その上に粘質土で形成され上面で平坦面を作る整地層Ⅲをすべてのトレンチで検出している。整地層Ⅲの上面の標高は、南側にある堀の石垣の天端の標高と概ね同じである。整地層Ⅳは寛永期拡張時の整地土、整地層Ⅲはその表土と考えられる。これら整地層Ⅲ・Ⅳは攪乱を受けていないこと、遺物の出土が少ないことなどから、寛永期から幕末期まで土地利用に大きな変革はなかったと考えられ、「二条城外廻り」として寛永期から幕末まで管理維持されていたものとみられる。

近代の遺構としては1トレンチで路面整地層Ⅰ、路面整地層Ⅱを検出した。各層とも造作の単位（硬化した舗装面の下は黄褐色の粘土質層、その下に砂質土層）が類似している。路面整地層Ⅰにはアスファルトが混じる。路面整地層Ⅱには、ガラス片、コールタールが混じる。アスファルトの混じる層を昭和期と考え、整地層Ⅲとの中間にあたる路面整地層Ⅱを明治・大正期と考えた。明治・大正期には、明治の大修理と大正天皇即位の大饗宴という二つの画期がある。昭和期の画期には、北側で行われた大礼記念大博覧会がある。調査地は昭和10年修正測図には「通り」として示されており、これらの画期に応じて、竹屋町通の路面として整備された面と考えられる。2トレンチで路面整地層Ⅱの最下層を検出したが他のトレンチでは近代の面は検出できず、幕末までの表土（整地層Ⅲ）から上の層は現代の植栽土が0.7～0.85mの厚さで盛られていた。

古墳時代の土師器や須恵器は、後世の遺構埋土への混入ではあるが、聚楽遺跡・二条城北遺跡に関連するものとみられる。

註

- 1) 『重要文化財二条城調査工事報告書』 元離宮二条城事務所 2011年

第4章 調査その2

1. 基本層序

調査区は4箇所設定し、内2箇所で断割調査を実施した。

各トレンチには地表下0.4～0.8mまで近代から現代盛土がある。その下には江戸時代前期（寛永期）のものと思われる整地層（整地層Ⅳ）が0.2～0.3mあり、石垣の裏込はこの整地層上面から成立している。なお江戸時代前期の整地層の下には中世の遺物包含層が認められる箇所がある（2・4トレンチ）。その下層は褐色粘質土あるいは褐色砂礫のいわゆる地山層である。また、石垣の裏込上面を覆う整地層Ⅲが部分的（2・4トレンチ）に認められる。

石垣天端石は西端から順に番号を付した。北面は227石、東面は19石である。以下、各調査区の詳細と石垣断面実測及び観察の結果を述べる。

2. 遺 構

(1) 1トレンチ（図17、図版4）

調査区は、外堀北側石垣の北西角から東へ約9mの位置に、石垣を含めて南北長6.7m、東西幅約1.0mで設定した。現地表の標高は北端で39.98m、石垣天端は39.49mである。

近代の遺構は、地表下0.5mで東西方向の道路側溝を検出した。花崗岩製の縁石を南北に並列させ、その間に南下がりの平坦面をセメントで仕上げた溝を作る。溝中央の標高は39.18mである。

石10南端から北へ4.66mの位置で江戸時代前期（寛永期）と思われる整地層（整地層Ⅳ）を検出した。この整地層を掘り込んで裏込があるが、石は少なく土が主となる。ここからは江戸時代後期以降の遺物が出土すること、栗石がまばらであること、天端石の石9と石10が接しておらず、約0.2mの隙間があることなどから、後世の修復箇所と思われる。

(2) 2トレンチ（図18、図版4）

調査区は、石垣北西角から東へ約50mの位置に、石垣を含めて南北長6.7m、東西幅約1.0mを設定した。現地表の標高は北端で40.0m、石垣天端は39.46mである。

表4 調査その2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
鎌倉時代 ～室町時代	遺物包含層Ⅴ	
江戸時代	整地層Ⅲ・Ⅳ、石垣裏込	
近現代	道路側溝	

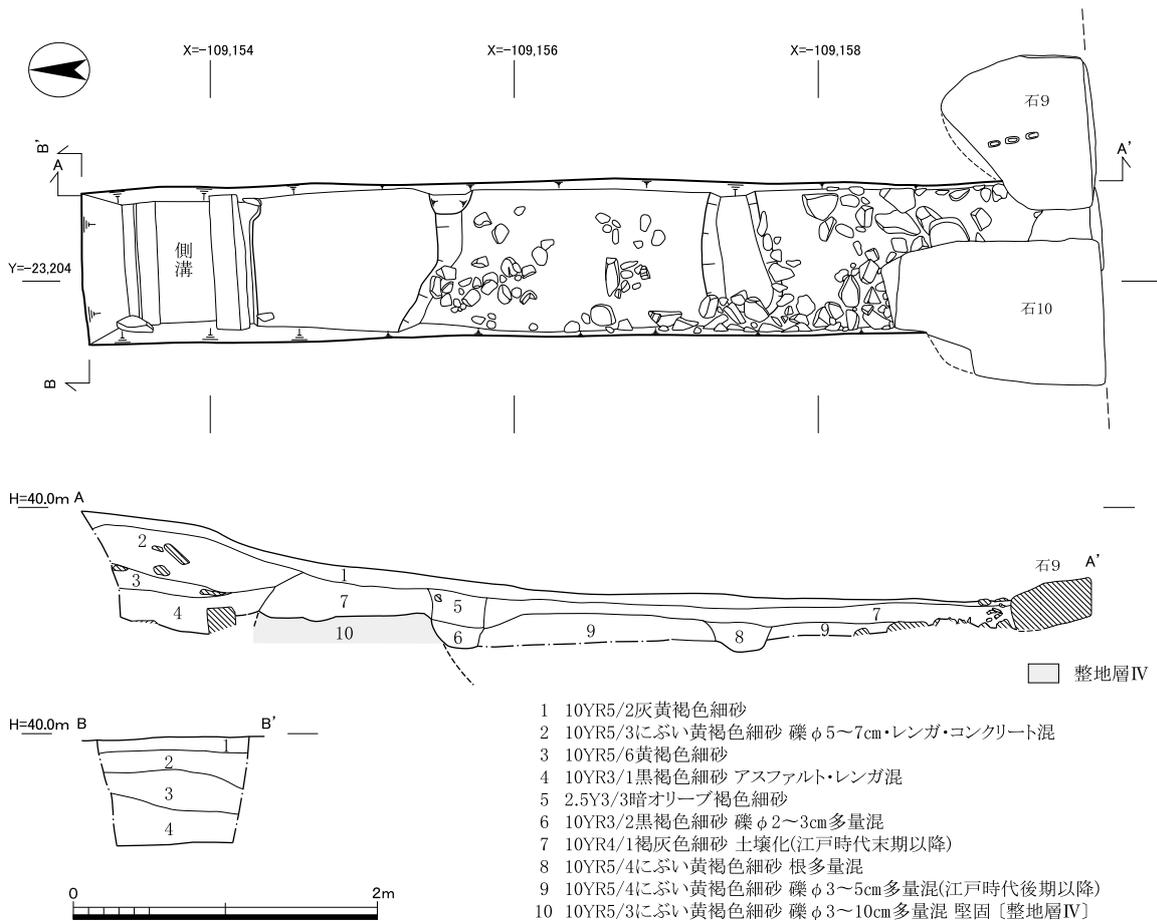


図17 調査その2 1トレンチ実測図 (1:50)

近代の遺構は、1トレンチと同様の道路側溝を検出した。溝中央の標高は39.14mである。

江戸時代の遺構は、石60から北へ4.8mの位置で、石垣の裏込の掘形を検出した。肩部付近には長径30cm以上の礫を2石並べる。裏込は径10~20cmの栗石を密に詰め、肩部は土砂(灰黄褐色+にぶい黄褐色細砂)で埋める。裏込上面は厚さ0.1mの褐色細砂混礫層(整地層Ⅲ)で整地される。

中世の包含層(遺物包含層V)は、上面の標高39.0m、厚さは約0.3m、土師器小片を含むが明確な時期は不明である。

基盤となる褐色粘質土層の地山は、標高38.62mで検出した。

(3) 3トレンチ (図19、図版5)

調査区は、外堀北側石垣の北西角から東へ約92.2mの位置に、石垣を含めて南北長3.6m、東西幅約1.0mで設定した。現地表面の標高は39.5m、石垣天端は39.25mである。

石111の南端から約2mの位置まで径10~20cm大の栗石が密に入れられる裏込を検出した。検出を栗石の上面で留めたため、裏込の掘形は確認していない。

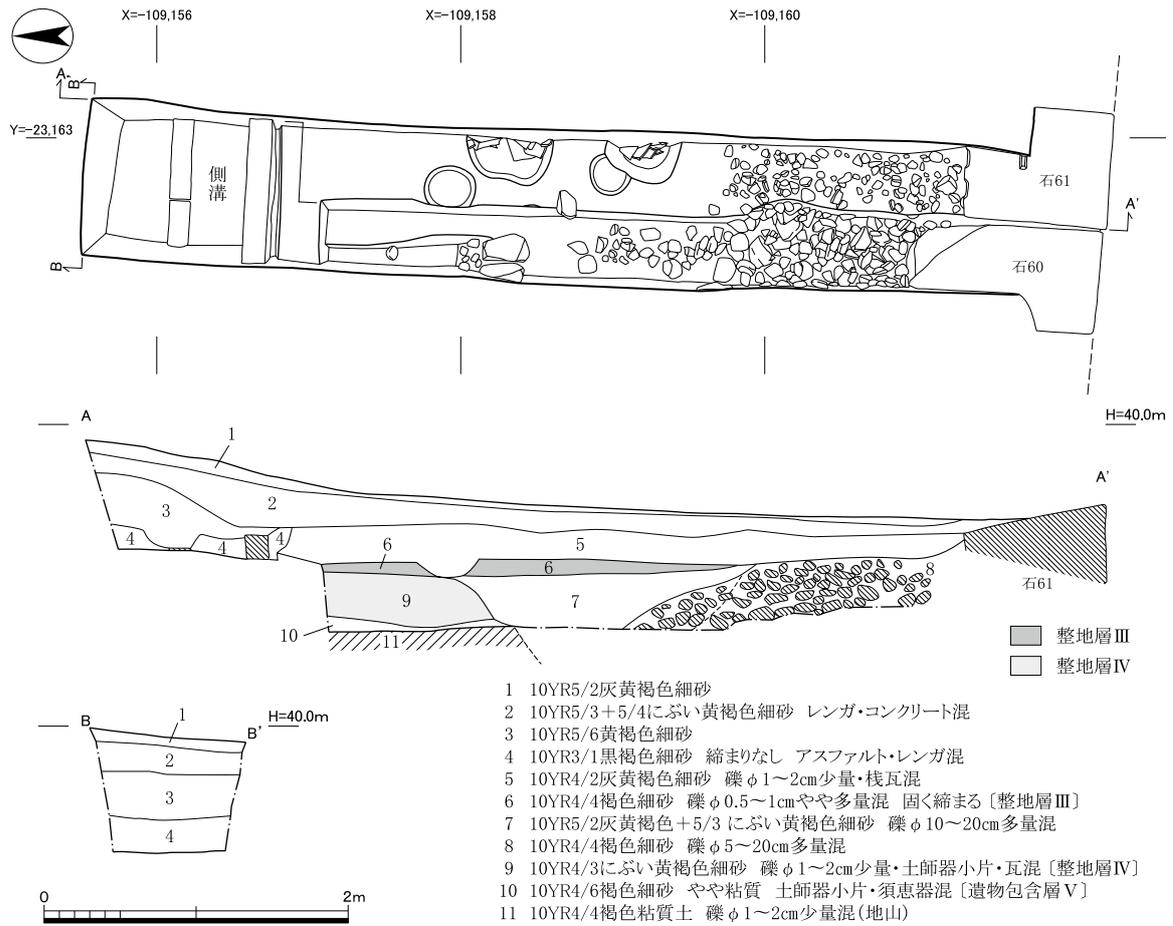


図18 調査その2 2トレンチ実測図(1:50)

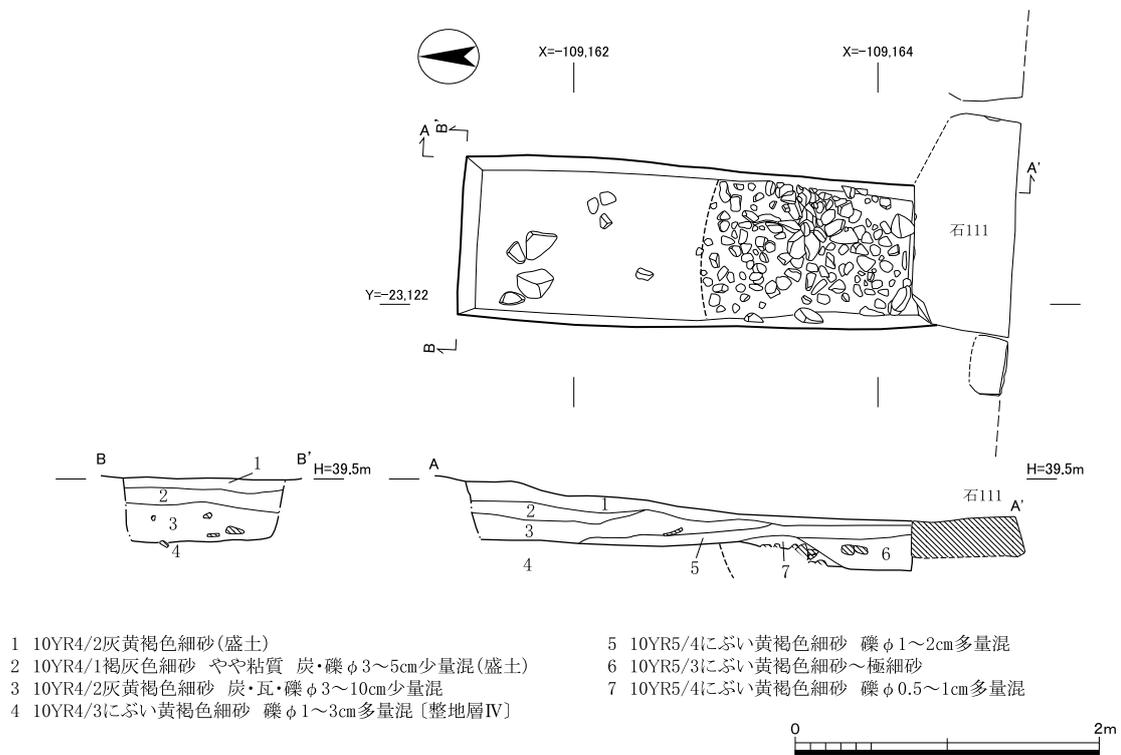


図19 調査その2 3トレンチ実測図(1:50)

(4) 4トレンチ (図20、図版5)

調査区は、外堀北側石垣の北西角から東へ約139mの位置に、石垣を含めて南北長5.2m、東西幅約1.0mで設定した。現地表の標高は39.7m、石垣天端は39.04mである。

石172南端から北へ3.72mに位置で、中世の包含層（遺物包含層V）を掘り込む石垣の裏込掘形を検出した。裏込は径10～20cmの栗石を密に詰め、上面は厚さ0.1mの整地層Ⅲ（にぶい黄褐色+褐色細砂混礫層）で整地される。裏込は大きく2層に分かれ、角礫を含むやや小ぶりの栗石を主体とする上層、径25cm大の大きな栗石を主体とする下層である。

遺物包含層Vは、上面の標高38.85m、厚さ約0.3m、土師器の小片と平安時代の瓦が出土した。明確な時期は不明である。

基盤となる褐色砂礫+にぶい黄褐色細砂層の地山は、標高38.65mで検出した。

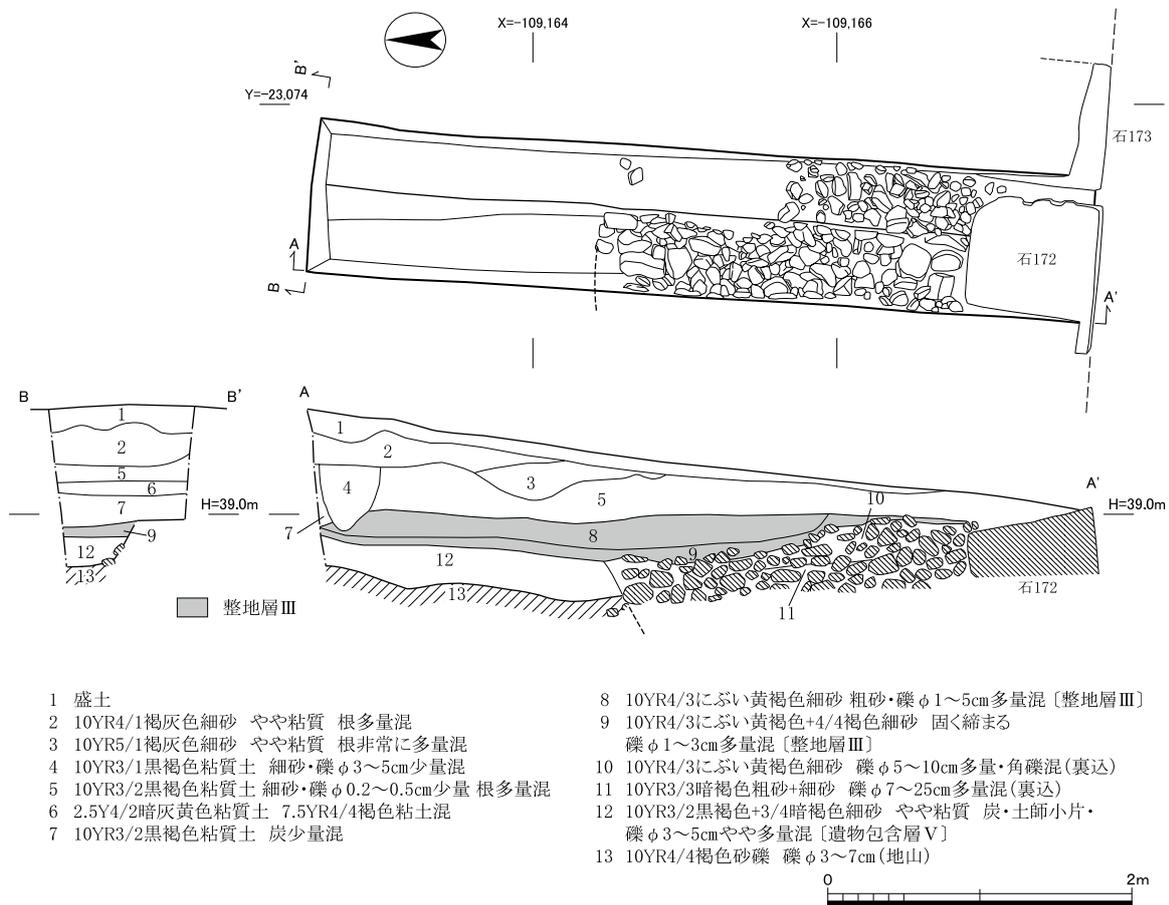


図20 調査その2 4トレンチ実測図 (1:50)

表5 調査その2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代	瓦				
江戸時代	土師器、須恵器、陶器、染付、伏見人形				
合計		2箱	0点(0箱)	2箱	0箱

3. 遺物

遺物は整理箱に2箱出土した。土器類1箱、瓦類が1箱である。その内訳は、土師器、須恵器、陶器、染付、伏見人形である。遺物の時期は、大半が江戸時代後期以降であるが、平安時代の瓦が少量出土している。

4. 小 結

今回の調査地である外堀石垣は調査その1と同様に二条城が寛永期に拡張された部分にあたる。中世の遺構は検出していないが、2・4トレンチで遺物包含層を検出した。

江戸時代の遺構は、各トレンチで石垣裏込の掘形を検出した。裏込は栗石と裏土を交互に入れる状況が一部では見られる。1トレンチでは裏込から江戸時代後期以降の遺物が出土した。4トレンチでは裏込の上層は角礫を含むやや小ぶりの栗石を主体とし、径25cm大の大きな栗石を主体とする下層とは様相が異なることから、修復の可能性が考えられる。

近代以降の遺構は、1・2トレンチでは、道路側溝を検出した。これは調査その1で検出した路面整地層に伴うものと思われる。側溝南端の標高は1トレンチでは39.17m、2トレンチでは39.11mと西方が高いことから、西から東へ排水したと思われる。

5. 石垣断面調査及び水中調査

(1) 石垣断面調査 (図21・22)

外堀北側石垣の天端石は北西角から北東角まで227石、距離約182m、北へ屈曲する西面は19石、距離約15mである。この石垣面の北西角を断面1とし東へ10m置きに22箇所、垂直方向の断面図を作成した。計測時の水面の標高は36.9mである。

最西端の断面1の天端標高は39.5m、東端の断面20は39.16mと、東方向へ徐々に下がる。堀の深さは、西端断面2では約5.2m(水深約2.6m)、東端の断面20では4.2m(水深約1.9m)、断面22では3.2m(水深約1.1m)と西が深く、東が浅くなる。

石垣の傾斜は、断面1～6までが79～80度前後、断面7～21が82度前後である。北東隅の断面22は約75度と最も緩やかである。

(2) 水中調査 (図21、図版6・7、表6)

北堀北岸の石垣水中部分を対象とした調査を6月24日に実施した。この調査はスキューバ潜水による石垣の目視・観察・動画撮影、その評価を佐賀大学の宮武正登教授が行い、スチール写真は山本祐司(水中カメラマン)が撮影を行った。それらの作業をNPO法人水中考古学研究所が支援した。

なお、調査にあたっては、水面上に支援ボートを配置し、緊急時に対応できる支援ダイバーを置いて安全をはかった。調査は午前中に石垣の西方から中央付近まで、午後に中央付近から北側への屈曲部分までを実施した。

調査の内容については、調査位置図と個別初見を一覧表にまとめた。

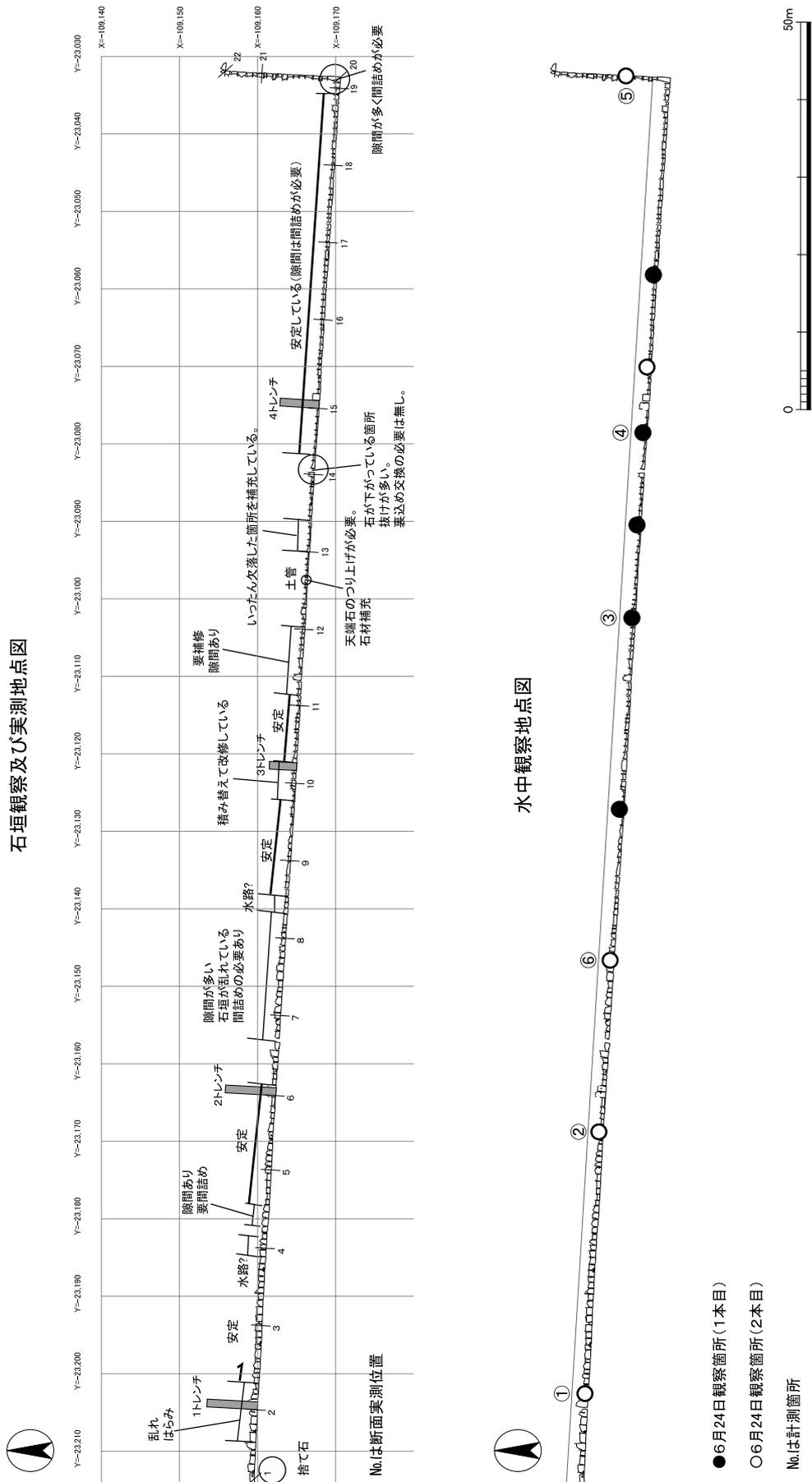


図21 石垣観察及び実測地点図・水中観察地点図 (1 : 800)

- 6月24日観察箇所(1本目)
- 6月24日観察箇所(2本目)
- No.は計測箇所

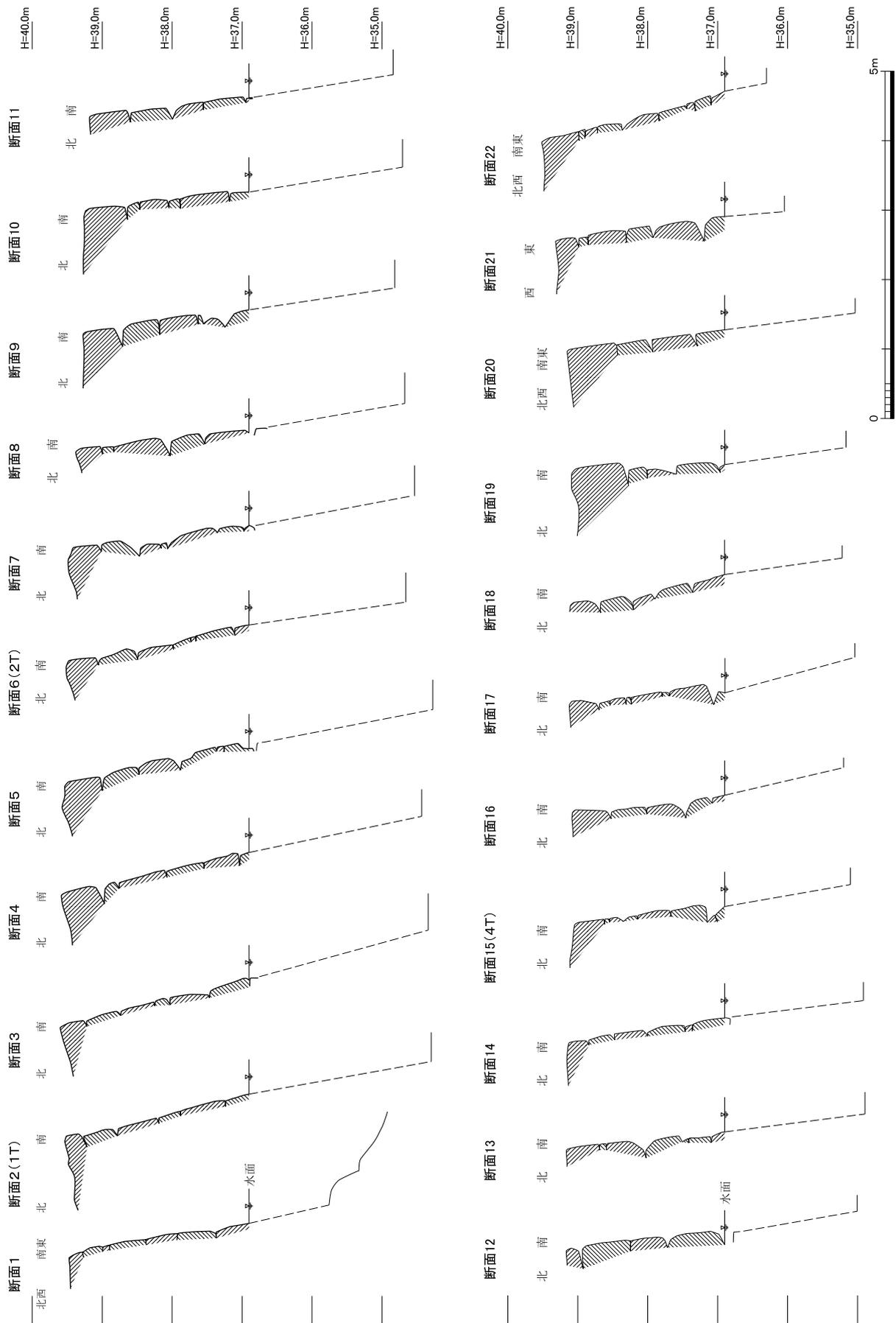


图22 石垣断面图 (1 : 80)

表 6 外堀石垣の水中目視調査の結果について

	状 況	現時点で想定できる変状原因	対 処 策
No.①	水面下0.2～0.6mの位置に、縦0.3～0.4m・横1.0cm前後の空隙あり。横目地が大きく開いた状態。	間詰石や小ぶりの築石の破砕・欠落により生じた空隙か。一方、同地点の水面上の石垣では「谷落とし積み」が顕著で、石材の割り直し・広範な積み替え(非常にはラフな手法)が認められる。「孕み」などの変状も発生しており、これら二次変状に起因するダメージが水中にまで及んでいる可能性がある。したがって、空隙自体が上記の積み直し範囲の境界に当たるとも考えられるが、水中環境の悪さから全体の視認ができず判別は困難である。	間詰石(大)の新規補充による空隙の解消。その場合、オリジナルの遺構との峻別を将来的に担保するため、構成石材とは異なる岩質の素材を使用するべきだが、別途、その行為自体のアーカイブ方法の検討を要する。
No.②	石垣最下段の根石付近で、隣り合う石材同士の間隙(「面」から「胴」の間)が大きく開いている(0.2～0.3m前後)。ただし、石垣ラインに明瞭な乱れはなく、築石の飛び出しもない。間隙の中に栗石はほとんど残っていないが、相互の築石の石垣面よりも1m以上「奥」で胴部(ないし離部)が接している。その付近には栗石が数点見える。	累面全体が均一に孕み出ない限り、こうした形状にはならない。しかし、水面上に目立った変状はなく、むしろ安定した「布積み」で目地の開きもない(石材加工度を参考にすれば、元和～寛永期の規格化進展の時代的特徴が看取できる)。あるいは創築当初から、基底付近の石材については外面付近で一定間隔があくように(石材相互が「胴部」よりも奥で接している＝石材の「控え」が相当長い)据えられていることを原則としていたことも考えられる。城の北側一帯からの湧水・浸透水が相当量に及ぶため、これを石材同士の間隙を密にした石垣で抑制するのではなく、敢えて隙間をあけて潤滑に濠内に地下水を流し込ませることで、石垣背面からの加圧を低減させる工夫が働いているのではないかと、つまり、経年変化による変状ではなく、土木技法の一種とも考えられる。ただし、本来は間隙内に装填されていたはずの栗石も欠落しており、上部からの加圧に対する不安定要素を生じさせている。なお、濠底付近のこれらの築石・根石は、「間知石」への指向性が顕著な水面上の石垣と異なっており、野面石なし粗割石を主体とする。この点、上記の土木上の目的から石材を変えているのか、それとも、慶長年間の創築期の古的様相を示す石垣の残存部で、実は二条城の拡張過程に関する従前の認識の再考を促がす遺構なのか、いずれにせよ非常に重要な部位と見なせる。	間隙に詰石を施すことは、場合によっては本来の土木上の意図に反することになる可能性も否定できない。前面に「布団籠(蛇籠)」を設置して耐久度補強を講じた方が無難と考える。その際、隙内の破砕石の充填仕様について、十分な通水性の確保が前提となる。
No.③	水面下0.4～0.6mの位置に、長径0.5m前後の大きさの「穴」が開く。	間詰石の脱落よりも築石の粉砕・欠損の可能性が考えられる。	築石の回復には上位の石垣面の解体を要する位置なので、その代替措置として大き目の間詰石の補充による空隙の必要。本来ならば欠落部からの石垣積み直しを要する。
No.④	水面下1.0～1.2mの位置に、縦長0.8m・横長0.7m前後の大きさの、外面台形状の築石があるが、その左右の横目地が大きく開いた状態にある。頂部だけで上位の石積みを支えている格好で、左右の築石との接点がなく極めて不安定。	当該の築石を左右から挟みこんで固定するための間詰石ないし小さめの築石が、破砕等の理由から脱落したものの、大きく空隙が開いたために阿爾石も側面の栗石層も流失し、築石の「軸」(「控」)の先端、(石尻)が石垣背後で水中に露出している状態になった。左手上部(水面上)の3～4mほど西側の石垣面一帯は、同様に介石・間詰石の欠落による目地の空隙が目立ち、下位の支持を失った築石が傾いている部位まで存在する。この変状の集中エリアと当該箇所とが連続している可能性が高いが、通視して確認できる水質環境ではないため断定はできない。いずれにせよこれらは、城内の多数箇所に見存している近現代期の補修(積み直し)によって生じた歪みや「縁切り」による変状とは考えにくく、地震などの外的要因による構成石材の脱落を想定したい。	陸上ならば解体補修を要する劣化度である。真栗石の補充ののち、大き目の間詰石の充填による空隙の解消を図るか、場合によっては築石に相当する大きさの新補材を用いる必要性も指摘される。断面14から第4トレンチの間の石垣を中心に、水没範囲の石垣前面の下半部一帯を「布団籠(蛇籠)」で網羅する工法(最低でも2段重ね)が取れば、一定の耐久性回復に繋がるだろう。
No.⑤	濠底に接する根石部の欠落。ちょうど築石1個相当の空隙が基底部に開いている。同様に出角(濠外岸の「折れ」)の隅角部の基底部にも同じ空隙があり、断面20(＝角後線)の右手、出角部東面石垣では「二番角石」を支えるべき「隅脇石」が見当たらない。	これもNo.②と同様に地下水処理に係る土木的特徴の可能性が考えられる。経年劣化等が原因で築石や隅角石の脱落があれば、それより上部の石材の沈下や寝込みが生ずるはずだが、この地点に関してはその変状がほとんど認められない。特に「隅脇石」の欠損となると、角石が大きく傾いたり途中で折れるといった深刻な現象に連動するが、その様子も見受けられない。つまりは構築当初から空隙をあけて石垣面を構成する設計であった可能性を考慮するを得ない。ただ角部稜線を注視すると、左右に角石がずれられた痕跡が認められ、一番角石と二番角石の「合端」(接触点)が2cmほど開いている等の地震の振動による影響を指摘することができる。	No.②と同じ理由から、空隙を詰石で完全に塞ぐことは避け、上部石材の沈下防止のために小さめの築石を詰め込んで支えとする。更にその前面には通水性に十分配慮した「布団籠(蛇籠)」を設置して耐久度補強を講じる必要がある。特に水面上隅角部が震災のダメージを示している以上、その基底部を完全に網羅した状態での補強を検討すべきである。
No.⑥	石垣面に向かって左手上(水面付近)から濠底にかけて斜降する目地が通っており、これが開いて石垣面の連続を断絶する状態を呈する。	当該地点の上部石垣一帯は特に石材間の空隙が多く、配石の乱れが著しい。断面7～8の間には先端から大きな「積み替え」痕跡が明瞭で、濠内まで及ぶ相当規模の補修があったことを明示している。数段階の修復が推測できる状態で、当該地点の斜降目地もその際の副産物と考えられるが、事後の経年に伴って目地幅が離れて開いてきたものと推測される。この種の変状は石垣背面からの土圧、裏栗層および背面盛土の不当沈下が原因となっているケースが多い。	布団籠による石垣前面からの「押さえ」を施すことで目地の開きの進行を抑制する。念のため天端での石垣背面の劣化程度把握を行った上で、盛土・栗石の補充の検討を要する。

※ 宮武正登教授(佐賀大学)作成

第5章 調査その3

1. 基本層序

調査区は2箇所設定し、調査その2の継続として5・6トレンチとした。

層序は、地表下0.23mまで近代から現代盛土、その下層は江戸時代後期以降の褐色細砂と黄褐色細砂層の化粧土、地表下0.3mで褐色細砂の整地層、地表下0.38m以下は裏込となる。

以下、各調査区の詳細を述べる。

2. 遺構

(1) 5トレンチ (図23、図版8)

調査区は、調査その2の1トレンチと2トレンチの間に位置し、石垣を含めて南北幅2m、東西長約3.2mを設定した。現地表面の標高は北端で39.44m、石垣天端は39.59mである。

調査では、石垣裏込や整地層を検出した。裏込は径5～20cm大の栗石を密に詰め、上層は褐色細砂層の整地層(整地層Ⅲ)、その上面は褐色細砂と黄褐色細砂混礫層の化粧土で整地される。整地層Ⅲからは江戸時代後期以降の遺物が出土した。

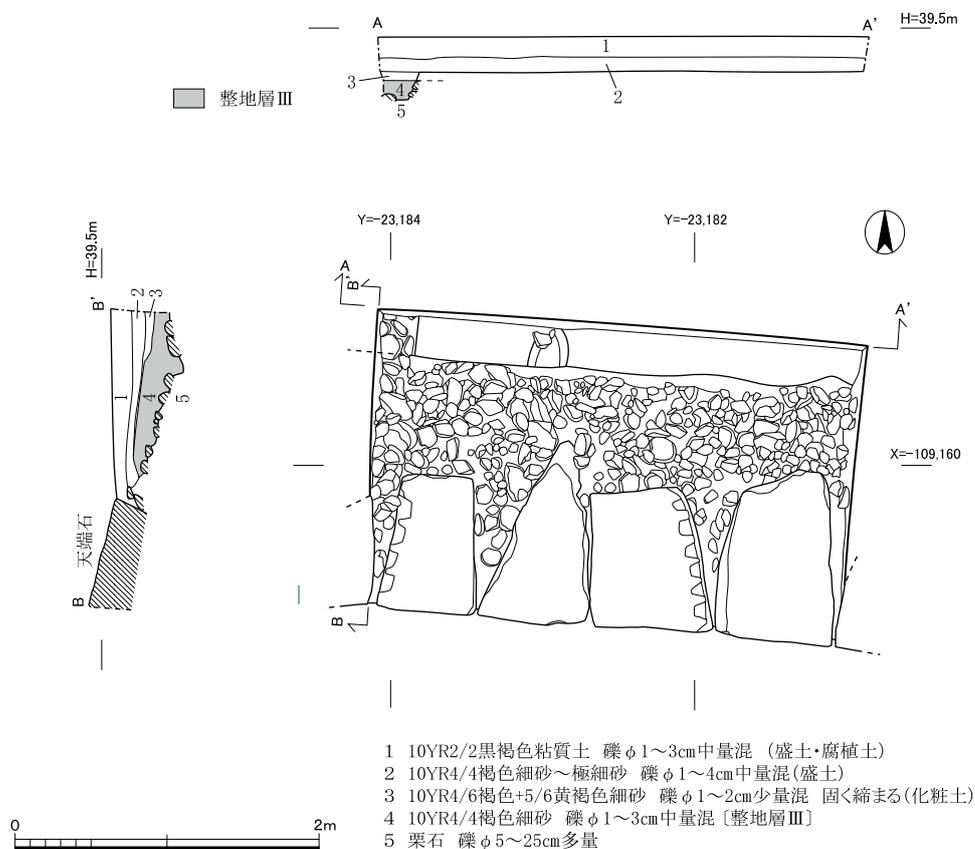


図23 調査その3 5トレンチ実測図 (1:50)

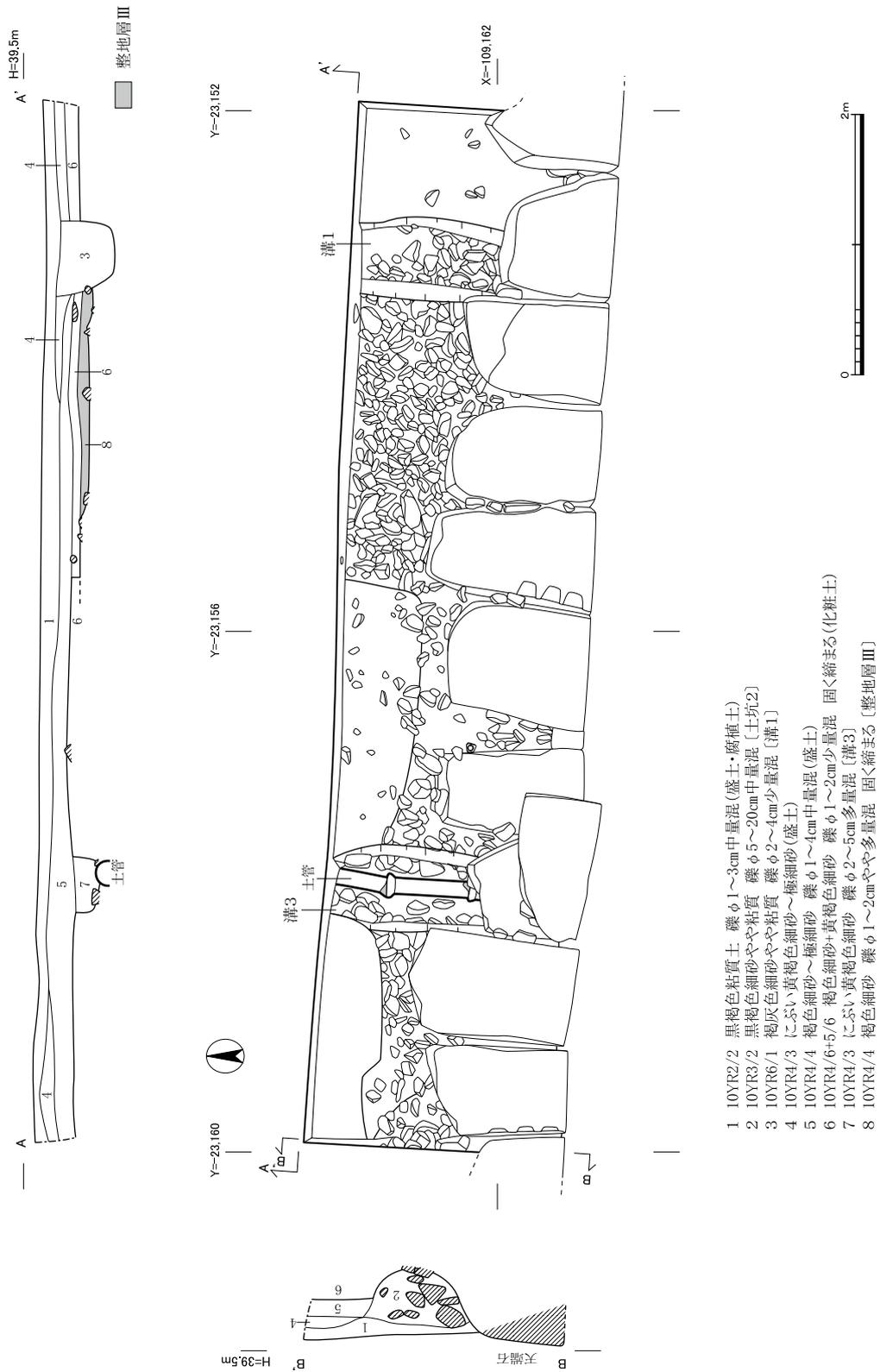


図24 調査その3 6トレンチ実測図(1:50)

(2) 6トレンチ (図24、図版8)

調査区は、調査その2の2トレンチの東に位置し、石垣を含めて南北幅2m、東西長約8mを設定した。現地表の標高は北端で39.42m、石垣天端は39.46mである。

遺構は、調査区東寄りの位置で、現代盛土直下から切り込む南北方向の溝1を検出した。東西幅0.58m、深さ0.46m、石垣裏面まで続くが用途は不明である。遺構の時期は近代以降である。また、調査区西端から約2m東、地表下0.45mの位置で、石垣に直交する南北方向の土管を検出した。土管は長さ0.6m、継手部分は漆喰で目止めされていた。掘形は幅0.42m、深さ約0.3m、土管検出の標高は38.95mである。土管は北石垣南面の天端石から2段目の下を潜り、天端から-0.68m(標高38.82m)の位置で排水口を確認した。

裏込については、径5～30cmの栗石を密に詰め、この上層は褐色細砂層の整地層(整地層Ⅲ)、その上面は褐色細砂と黄褐色細砂混礫層の化粧土で整地される。整地層Ⅲからは江戸時代後期以降の遺物が出土した。

3. 遺物

遺物は整理箱に3箱出土した。土器、瓦類、金属製品である。その内訳は、土師器・陶器・染付・焼締陶器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦、釘などである。遺物の時期は、大半が江戸時代後期以降であるが、中世、平安時代の瓦が少量出土している。

表7 調査その3 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	整地層Ⅲ	
近現代	土管	

表8 調査その3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代～中世	瓦				
江戸時代	土師器、陶器、染付、焼締陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、釘				
合計		3箱	0点(0箱)	3箱	0箱

4. 小 結

今回の調査は、前回調査時に保存整備委員会から石の積み直しではないかとの指摘を受け、実施した箇所である。6トレンチでは、天端石のズレや隙間がある箇所にあたっており、石垣下に潜る土管を検出した（図25・26）。このことから、近代以降、苗圃となる以前の道路側溝からの南北方向の排水施設を作るため、石垣の一部を取り外し、土管を埋めた後に積み直したものであることが判明した。

また、調査その2の1トレンチ付近では、石垣天端から-0.7m（標高約38.8m）の位置で、天端石の下を潜る土管排水口を確認した。これは、調査その1の1トレンチ東部で検出した南北方向の土管を埋設した暗渠の延長とみられ、土管底部の標高は約39mであることから、北から南へと排水する（図27）。調査地付近の石垣は、石垣面の観察からも延長する付近が石の乱れなどが著しく、近代以降に石の積み直しが行われたことが確実となった。



図25 調査その3 6トレンチ石垣前面土管排水口（南から）



図26 調査その3 6トレンチ土管検出状況（北西から）

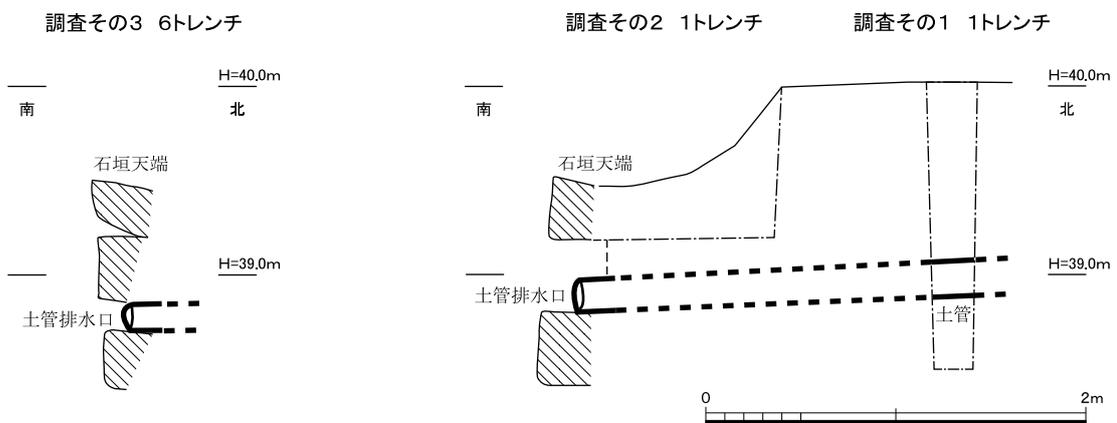


図27 土管出土状況模式図（1：40）

第6章 まとめ

今回の調査地は、二条城が寛永元年（1624）から同3年（1626）に徳川家光により西側に城域が拡張された箇所にあたる。調査地のほぼ全域で、この寛永期にあたる整地層が確認された。

二条城での大規模な整備・修復は、寛永期、文久期、明治期、大正期があげられる。石垣の改修記録は、寛文2年（1662）の地震においては「石垣悉損」の記録があり、その後修復されている。また、貞享元年（1684）には「北外側石垣崩れ積み直し」、文政13年（1830）の地震においても、外回り石垣は「所々孕出」、「所々崩」などの被害があったと記録される。明治38年（1905）には「外濠石垣小繕用」、昭和43年（1968）には豪雨により石垣が崩落し、その後石垣の復旧を行っている¹⁾。

石垣の調査では修復痕跡を確認した。上述の記録からは、今回の調査地と限定できる記述はみられないが、修復記録に残される以外にも様々な修復があったものと思われる。

調査では、平安時代から近代に至る遺構や遺物を検出している。特に調査その1では、平安時代前期の壬生大路延長路の西側溝や櫛笥小路延長路の東側溝など、二条城築城前の遺構を確認することもできた。

水中調査の結果については調査内容の項で述べたとおりであるが、石垣の変状部分やその状況を明らかにすることができた。調査は、城郭の堀を形成する石垣の水中部分を、調査担当者が潜水して、直接目視で観察する方法を用いたものであるが、こうした潜水調査は日本でも初めてのことである。調査当日、堀の水の透視度は水平方向に約50cm程度と必ずしも良い環境とは言えなかったが、こうした中で一定の成果を示すことができたことの意義は大きい。他の城郭にも同様な調査ができる可能性を示すものと言えるだろう。

註

- 1) 『重要文化財二条城調査工事報告書』 元離宮二条城事務所 2011年

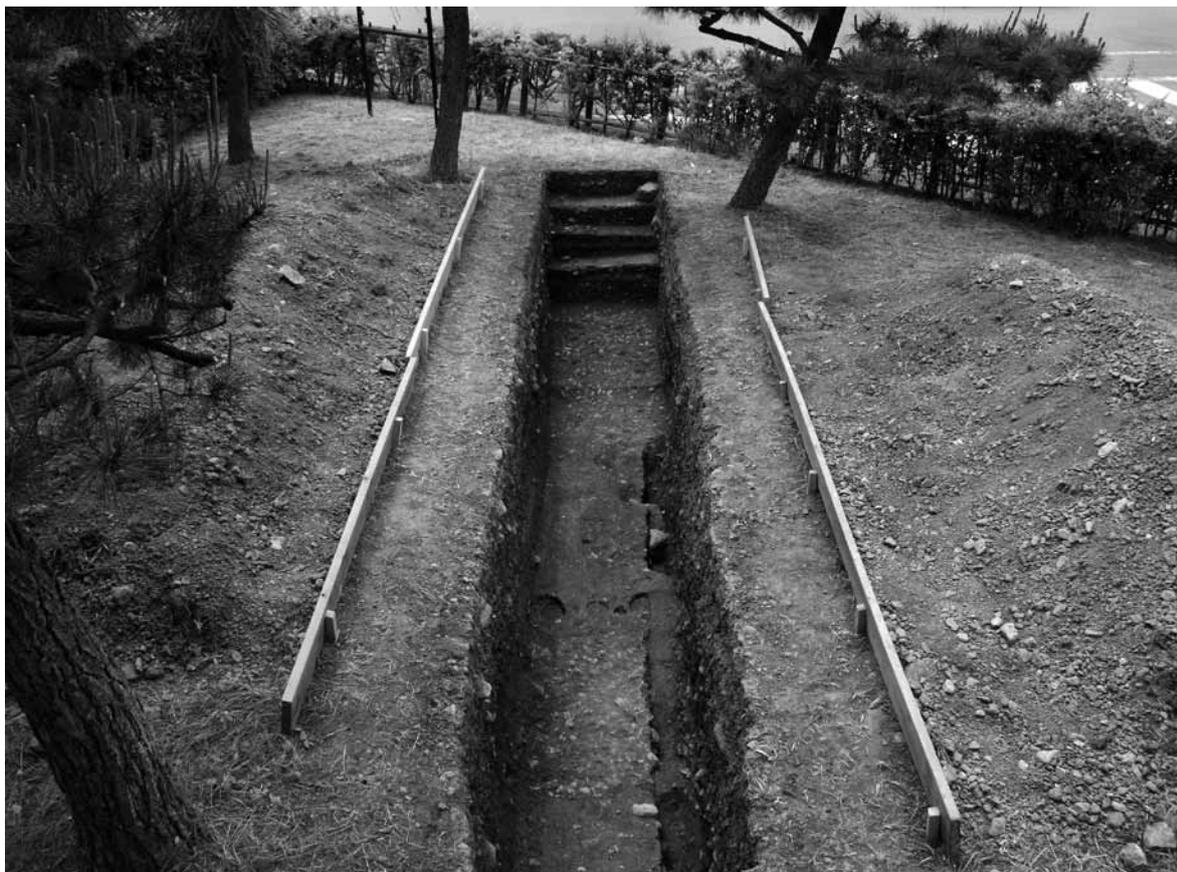
圖 版



1 調査地遠景（南東から）



2 外堀北石垣（西から）



1 調査その1 1トレンチ全景（東から）



2 調査その1 1トレンチ土層断面（北東から）



1 調査その1 2トレンチ全景 (南東から)



2 調査その1 3トレンチ全景 (西から)



3 調査その1 4トレンチ全景 (西から)



4 調査その1 4トレンチ東壁 (西から)



1 調査その2 1トレンチ全景（北から）



2 調査その2 2トレンチ全景（北から）



1 調査その2 3トレンチ全景（北西から）



2 調査その2 4トレンチ全景（北から）



1 調査その2 水中調査風景（西から）



2 調査その2 ①地点付近の状況



1 調査その2 ③地点付近の状況



2 調査その2 断面20地点付近の状況



1 調査その3 5トレンチ全景（東から）



2 調査その3 6トレンチ全景（西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)・へいあんきゆうあと							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)・平安宮跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-19							
編著者名	近藤章子・モンペティ恭代・吉崎 伸							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2019年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城) へいあんきゆうあと 平安宮跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 にじょうじょうちやう 二条城町541	26100	A453 2	35度 00分 57秒	135度 44分 48秒	2015年5月 18日～2016 年11月15日	85.5㎡	二条城整備計画に伴う改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城) 平安宮跡	史跡 宮殿跡	古墳時代		土師器、須恵器		平安宮内を区画する溝のほか、二条城寛永期拡張時の整地層や石垣裏込などを検出した。石垣の調査では、修復痕跡を確認した。潜水調査を行い、石垣の水中部分を目視で観察した。		
		平安時代	溝、ピット、落込み、遺物包含層	土師器、須恵器、黒色土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦				
		鎌倉時代～室町時代	土坑、柱穴、ピット、溝、落込み、遺物包含層	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器				
		江戸時代	溝、整地層、石垣裏込	土師器、須恵器、陶器、染付、施釉陶器、伏見人形、焼締陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、釘				
		近現代	路面整地層、土坑、道路側溝、土管	染付、磁器、施釉陶器、丸瓦、平瓦、棧瓦、ガラス片、鉄釘				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-19

史跡旧二条離宮（二条城跡）・平安宮跡

発行日 2019年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961